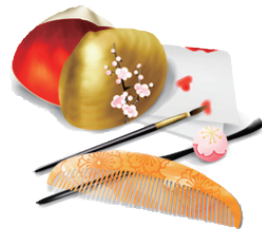


ふおーらむ

第8号



図書館サポートフォーラム

目 次

巻頭特集

第 13 回「図書館サポートフォーラム賞」授賞式…………… 2

山崎代表 挨拶

水谷委員長 講評

河塚幸子氏 受賞の言葉

飯澤文夫氏 受賞の言葉

高山京子氏 受賞の言葉

松尾浩也氏 お祝いの言葉

文 集

山内 明子『俳句八句』…………… 12

井上 如『本は読むものか書くものか』…………… 13

恵光院 白『詠人(うたびと)に`アート`を想う』…………… 16

岡田 恵子『パリでの「お呼ばれ」』…………… 21

門倉百合子『大連国際音楽倶楽部参加記』…………… 23

古賀 節子『伊藤博文の「日の丸演説」』…………… 26

今 まど子『私でもボランティア』…………… 28

末吉 哲郎『BAA 創立 30 周年』…………… 30

平井 紀子『2011 年 6 月 11 日』…………… 32

松岡 享子『3.11 からの出発』…………… 34

水谷 長志『リスボンのこと』…………… 39

編集後記

第13回 図書館サポーターフォーラム賞授賞式

於／2011年4月11日（月）

喜山倶楽部 光琳の間（日本教育会館内9階）

1. 挨拶

山崎久道氏

(図書館サポーターフォーラム代表幹事)

代表幹事の山崎でございます。

お三方、本日はおめでとうございます。

図書館サポーターフォーラムは、ここにいらつ
しゃいます末吉前代表幹事が、図書館という
ものをもっと社会的な存在にしなければいけな
い、あるいは国際的連携をとらなければという
壮大なお考えのもとに始められたもので、今こ
そその考え方が大事なものになってきているわ
けです。

申すまでも無く、今回の東日本大震災に関しまして、目を覆いたくなるような状況が発生しております。家も何もかも全てが流されてしまう中で、いわゆる記録とか文献とかの意義が認められてくる気がするのです。要するに、

思い出とか記憶とか、あるいはその時の事実といったものの、そうした全てのものが流れ去ってしまう一方で、記録や文献は残るのです。資料とか文献の機能の社会的重要性をこのように身に迫って感じる機会が、これまで私たちにはなかったのではないのでしょうか。

もちろん、大変に悲惨なことです。が、こうした事態を前にして、図書館とか文書館、美術館、博物館などの使命が、さらに大きくなる気がしております。今回の被災は大変に不幸なことであります。しかし、その中で私たちは専門分野を持った職業人として、何か社会に貢献できないだろうかという精神によって、まさにこのフォーラムの設立の趣旨を活かすべくとてころにきているのではないかということを実感しています。

今回、そうした図書館の世界で、地道に仕事をされてきた方を、表彰させていただけることは非常に嬉しいことです。こういった

2. 講評

水谷長志氏

(表彰委員会委員長)

表彰委員長の水谷と申します。本来なら戸田光昭先生のお役目でございますがその代役として仰せつかりました。

表彰委員長は初代井上如先生、二代目は山崎久道先生、そして三代目は戸田先生ですが、それぞれの委員長が皆、サポートフォーラムの文集に採録されておりますように、非常に奔放で素晴らしい表彰のコメントを残してくれております。私はそうした偉才がございませんので、皆様のお手許にあります「授賞理由」を読み上

げるということで替えさせていただきます。

表彰委員会における選考は、本年2月25日に行われました。15名の方に投票をさせていただいたのですが、実際に2月25日に出席された方は9名でした。9名の方に、まずは最大3つを選考していただいて、投票をしました。1次選考という形で、9名の方で3人の授賞者を決めたのですが、それが今日授賞の方々です。念の為にいうことで、欠席6名の方々の投票についてもカウントしたのですが、全く同じ結果が出ました。ということは、きわめて妥当な選考であったということ、すんなりと三名の授賞が決定いたしました。

まず河塚幸子さん。元ナショナル住宅産業にお勤めになられて、近畿大学ほか多数の大学で非常勤講師をされると共に、情報科学技術協会の理事などもなさっていました。きわめて広範なお仕事をされたということは、今日お配りしている資料からお分かり頂けると幸いです。

34年間勤務された、ナショナル住宅産業では女性管理職として技術情報担当課長の重責を担われ、社内情報管理のシステム開発などをつとめて社長賞を二度も受賞されております。

平成5年以降は主としてINFOSTAのサーチャーセミナー等の講師として社外に出て、ま

た、インターネットによる情報管理ということについても、先導的な役割をされたと伺っております。

平成14年に早期退職後は、司書講習等非常勤をつとめながら、再び大学の修士課程に入学され「市場化時代のビジネス支援図書館の経営―現状と課題」の修論をもって大阪市立大学大学院経営研究科を修了されました。斯界の先導者であると同時に、常に学ぶということを続けていらつしやるその姿勢こそが、周りの者を鼓舞していったのではないのでしょうか。その旺盛かつ積極果敢な行動を高く評価して今回の授賞とさせていただきます。

次に飯澤文夫さんについてお話いたします。

飯澤文夫さんは明治大学図書館に長く勤務されていて、明治大学史資料センターの研究調査員をされているということ。32年間、一貫して郷土史研究雑誌の目次情報を丹念に博搜して『地方史研究雑誌目次速報』を編集、1997年からは年刊累積版として『地方史文献年鑑』を刊行されています。

皆様のお手元に『地方史情報』といったものと、岩田書院の出版目録があると思うのですが、私の職場にもこれが届けられるたびに、何とすごいものが作られているのだろうかと感じ

させられておりました。一番最近の2011年3月の102号の編集後記を読ませていただくと「長く無人のままにしている長野県辰野町の生家は、築150年前後と推定される」というようなことが書かれていましたが、さすがにこういう生家を持つ方は歴史と深くかわりあいながらお仕事をされているのかなと、改めて感じました。

地方史というのは、考古学・民俗学・産業史・人物研究など広範囲にわたると共に、歴史研究の基礎的資料でありながら、継続的な書誌情報や資料選定が非常に難しいものです。こうした地道な文献書誌の選定が継続されることによって、埋もれがちな資料が継承されているということは、大変に尊いことだと思っております。

3.11の東日本大震災の光景を見ると、こういった地域資料というものは、災害の下ではまったく間に消えてしまうと思われまふ。図書館やミュージアムあるいはアーカイブ、そういった館の中に入っている資料は何か持ちこたえるのですが、民間のお宅にあった資料は本当にはかなく消えていってしまうものだなということ、今回の震災であらためて強く思いました。

そういう意味からも、飯澤さんが記録されているこの地方史に関わる文献の一点一点がいか

録として編集することによって、歴史が継承されていくのだということを、震災を目の当りにして思いました。

このようなお仕事を飯澤さんはされているのですが、同時に『地方史情報』といった雑誌や累積版を刊行しておられる出版社・岩田書院さん。この出版社のお仕事自体も非常に貴重なものとして表彰したいと思います。

三番目ですが、高山京子さん。元法務図書館勤務。朝日新聞の2009年5月17日の記事を読まれた方も沢山いらっしゃるかと思います。法務図書館に長く勤務されていて、ここに眠っていた2万点余の図書を、10年の歳月をかけてまとめられた。その背景には、図書館をよく知っている生き字引であった高山さんのバックグラウンドがあつてのことだと思います。ボランティアで一点一点の図書を吟味して目録化した、これは近代日本法曹史研究に大きな貢献をもたらすものであると書かれています。

この作業に当たっては、元宮内庁図書館勤務の藤井祥子さんの助力も大きかったと伝えられています。高山さんと藤井さん、二人の連携というコラボレーションがあつて、その目録に辿り着いたような感があります。

私は思うのですが、図書館員というのは在職中に培った知見、あるいはその技能は退職し

たという段階で切れてしまうのではなく、退職後もこのように形あるものとして成果を残すことができるのだと。生涯現役でありたいと願う我々を含めて、後進に大きな夢を与え、励ましてくださいました。

コメントはこれで終わりました、緊急討議というプリントが入っておりますので、ご覧下さい。

図書館サポートフォーラムというのは、社会に対して図書館の意味を定見する活動というように言われています。今回の東日本大震災に際して、若手の図書館員たちを中心に被災支援をするために被災の情報を集約しようという動きが立ち上がりました。それは非常に早い動きで、震災の翌日にはすでにサイトが立ち上がっていました。最初はライブラリーから始まり、ミュージアム、アーカイブスと同じように被災状況を確認するといったサイトが立ち上がりました。そして今は、Kすなわち公民館も含めて、save MLAKという活動をしております。この活動を広く知っていただくために、緊急討議の場が4月23日、目白の学習院大学3号館203教室で開かれます。今、若い図書館員たちがどういう技能を持って、どういう問題意識で、どういう行動をこの局面において展開しようとしているのかということを知る貴重な機会になると思

います。是非、ご参加いただければと思っています。

今回の大震災からの復旧、復興は、短期間で出来るものではないでしょう。単に図書館だけではなく、業務体制や命令系統など全体で、何とか文化財の復興をしていきたいと考えています。

そうした意味でも、この緊急討議の場が、四つの分野から文化財の復旧、あるいは東日本、東北、北関東に起こった悲惨な状況をリカバリする、スターティング・ポイントになるのではないかと思います。是非、こうした活動があるということも、広めていただきたいとお話させていただきました。どうもご静聴ありがとうございました。

3. 受賞の言葉

河塚幸子氏

(元ナショナル住宅産業(株)・近畿大学非常勤講師・(社)情報科学協会理事)

本日は、栄えある図書館サポートフォーラム賞を頂戴し、誠にありがとうございます。

この賞の趣旨である、ユニークで社会的に意

義のある各種図書館活動を表彰するという内容にふさわしいかどうか、自信はありませんが、試行錯誤しながらやってきたことをこの場を借りてご紹介し、これまで支えていただいた多くの方々、賞を推薦いただいた関係者の皆様へのお礼とさせていただきます。

情報収集手段としての電子化のすすめの社会活動

まず、70年代に企業の中に図書・資料室を創設し、80年代には冊子体の図書・雑誌の管理と並行してデータベースを導入し、電子化を進めました。データベースの普及を社内にとどまらず、社外にも目を向け、地域の企業の集まりに自社の活用事例を紹介し、データベースの導入メリットを企業活動の延長上に社会活動へと展開しました。最初は、和歌山テクノ財団、次に、門真市ロータリークラブの集まりへ「企業で活躍するインフォメーションサッチャー」というテーマで、少ない投資で効率的な情報収集ができるツールとサッチャーという職種の女性の活躍ぶりを紹介しました。いずれも、普段は図書館や情報機関とは殆ど縁のない中小企業の経営者や管理者に紹介しましたが、講演後は反響が大きく握手攻めにありました。

戦略的データベースの活用事例を新聞社の依頼を受けてセミナー

多くの企業は、ベンダーのすすめによってデータベースの導入を進めてきましたが、技術的なことはマスターしたけれど、それを戦略的に業務にどのように生かすのか、明快な答えが分らないというのを聞きましたので、調査分析した事例を紹介し活用のヒントを提供してしました。

ライフワークとしての情報検索技術者認定資格制度の普及

データベース全盛期の1985年に社団法人情報科学技術協会は、情報検索技術者認定試験を創設し、情報を効果的に検索し、活用するための基礎的知識・技術の保有者を認定し、社会的認識を高める事業を進めてきました。協会の役員として試験に伴う研修セミナーを企画し、講師を20数回以上続けてきました。当初、この試験の受験者は企業の人が始どでしたが、最近では図書館員も司書に最も近い資格として、受験者が急増しています。ある公共図書館では、職員全員合格を目指し、特別セミナーの要請もあり、関心も高まっています。

大学における司書課程の講義

企業を退職後、近畿大学、桃山学院大学等9大学にも及び非常勤講師として、企業の図書室の運営実績をベースに、主として「情報検索演

習」、「専門資料論」、「情報サービス概説」等の講義を担当しています。また、学生には前述の「情報検索基礎能力試験」の認定取得をすすめ、毎年数十人の合格者を輩出し、図書館員として即戦力のある人材育成に努めています。

インターネット時代に対応した情報マンの育成

最近では、誰もがインターネット検索をする時代ですが、情報専門家の図書館員には、一味違う検索を手掛けるノウハウをマスターし、図書館の利用者の相談に対応するスキルを身につけてもらうため、主として図書館派遣スタッフや一般企業の情報担当初心者向けに、「情報源としてのインターネットの活用法」を講演し、多様なメディアに対応できる情報マンの育成を手掛けています。

以上、データベースやインターネット情報源の活用を促す情報リテラシー教育を通じて、PRと人材育成に努めてまいりました。

これまで会社の上司や先輩、同僚、部下並びに社外の情報機関の専門家など、多くの方々の支援を得て仕事を続けてまいりました。これからは、サポートする側になって、情報の仕事は面白いと思える人を増やし、豊かな社会形成に役立ちたいと思っています。ありがとうございました。

飯澤文夫氏

(元明治大学図書館勤務 明治大学史資料
センター研究調査員)

この度は図書館サポートフォーラム賞に選定いただきまして、誠に有難うございました。

先程、講評の中でもお話しいただきましたが、私がこの仕事について32年になります。名著出版が1973年に創刊した、「歴史手帖」という月刊雑誌を、私は創刊号から購読していました。そこに「地方史雑誌・文献目録」の欄があり、縁あって1979年5月から、この欄の編集を担当することになりました。

岩田書院の岩田さんは、その当時、名著出版におられ、書誌というものの重要性を、大変によく理解、認識されている編集者でした。私が学んだ書誌作成の指導者である早稲田大学図書館の深井さんと懇意にされていて、深井さんを紹介して岩田さんと親しくなりました。

「歴史手帖」は1997年2月に休刊になってしまいましたが、独立して岩田書院を立ち上げておられた岩田さんは、「この仕事は絶対に続けなくてはならない。20年間続けてきた地方史の文献目録の仕事が消してはいけない。そのために自分の出版社で、継続するための情報誌を出そう」と、「歴史手帖」の休刊から僅か4ヵ月後の6月に、雑誌「地方情報誌」を創刊され

たのです。

そして、99年からは累積版として『地方史文献年鑑』が刊行されることになりました。出版不況の中で、売れることがそれほど見込めないものを、あえて出版するという決断をされたのです。非常に強い意志と情熱を持っておられました。本来、顕彰されるべきは岩田さんではないかと、心から思っております。

もう一人、かつて、名著出版の編集者で、独立して「白鳥舎」という編集工房を興した長野県在住の白鳥さんという方がおります。岩田書院に目録の仕事が移ってから、白鳥さんがデータ入力・加工処理と版組・編集をしてくれていました。名著出版の時代は、毎月、原稿用紙に200枚とか300枚を手書きで書いて渡すという作業をしていたのですが、白鳥さんのお蔭で、今はその大変な作業から解放されました。

岩田書院のホームページでデータを公開することも出来、その後の発展にもつながっていったのです。白鳥さんにも、非常に感謝をしております。この三人でいただいた賞だと思っております。このことを是非、記録にとどめていただきたく、紹介させていただきました。

申すまでもないことですが、全国の郷土史研究団体の皆さんからの雑誌と情報の提供によって、この仕事は成り立っています。最新の年鑑には、二千誌を超える雑誌を掲載しております

て、それらの団体と常に連携を取り合っています。支援をいただいている沢山の方たちにもお礼を申し上げます。

東日本大震災では青森から茨城まで、平素協力いただいている方々や研究団体、県立図書館も沢山被災されました。石巻や南相馬の団体とは、未だに連絡がとれません。やっと2、3日前に福島県のいわき地方史研究会と電話で話すことができました。幸いなことに死亡された方はいないとの事だったので胸をなで下ろしています。しかし団体は機能停止をしてしまっていて、いつ復興できるかわからないと聞かされました。地域資料が、どうしてなくなってしまったかも心配され、一日も早い復旧を祈るしかありません。

ところで、この賞をいただきまして、大変に嬉しいことが三つあります。

一つは地方史という、なかなか評価されることが少ないマイナーな世界に目を向けていただいたことです。国立国会図書館の「雑誌記事索引収録誌一覧」と『地方史文献年鑑2009』で、岩手県と宮城県、福島県の3県をざっとチェックしてみました。年鑑では3県で96誌を採録していますが、「雑誌記事索引」の採録対象誌はその内の13誌だけで、14パーセントにしかありません。それも、各県にある大学の史学・民俗系紀要とか、県立博物館の研

究報告、考古学会の研究誌といったものに限られ、圧倒的多数の、在野の郷土史家たちが出している雑誌は、少なくともこの3県に限って言えば、1誌もありませんでした。

例えば、福島県の「会津史談」は1931年の創刊で、毎号200ページを超え、80年以上も続いている大変に立派な雑誌です。また、「仙台郷土研究」のように、東北地方を代表し、地方史研究をリードしてきた雑誌も採録対象になっていませんでした。これは非常に残念なことです。私たちの仕事はそうしたものを丹念に拾っていくことに意義があるのだと考えております。

後の二つは私的なことなのですが、私が図書館員として、あるいは書誌作成者として大変お世話になり、尊敬している深井人詩さん、松下鈞さん、平井紀子さん、大森一彦さんという方々と名を連ねることができたことです。

大森一彦さんは一昨年の受賞者で、仙台に住んでおられます。震災以来、二日に一度位、電話や手紙でやり取りをしています。幸いにお宅は大丈夫で、お怪我もなく、本日ご出席の皆様は、元気にやっていると伝えて欲しいとの伝言でした。この場を借りてお伝えしておきます。

今ひとつは、図書館サポーターフォーラム賞の、「社会的に意義のある図書館活動を表彰する、

そして、図書館活動の社会的広報に寄与する」という目的です。私は1980年に「書誌索引展望」の仕事で、深井編集長に同行して、内閣文庫の専門官であられた福井保先生にインタビューさせていただきました。その時に福井先生は、図書館員というのは、書庫の中を自由に歩き回れる、いろいろな資料を自由に見ることが出来る、これは図書館員の特権である、その特権で得た知識を、利用者に提供するのが図書館員の義務であると言われました。

その後、ずっとそのように出来たかどうか自信はないのですが、30年間、福井先生の言葉をいつも胸に温めて仕事をしてきたつもりです。図書館員として得た知識やスキルを活かし、地方史に関する情報を世間に発表し続けてきたのは、やはり社会的意義ということを意識していたからです。そういう観点からもこの賞に選んでいただいたことを嬉しく思っております。

最後になりますが、今、図書館員時代の恩師である柳田国男研究者の故後藤藤総一郎先生は、地域の歴史を学ぶこと、その経験を普遍化して、より良い共同体を作っていくことが大事である、と常に言われたことを思い起こしています。

本日皆さんにお配りしたペーパーは、仙台の郷土史家の方の研究と、陸前高田市の長洞地区という地域の報告です。郷土史家の研究は、16

年も前に過去の歴史を調べて、今回のような被害が起こり得ることを警告しています。しっかりと社会の中で取り上げられることがなかったことは、非常に残念なことです。長洞地区の場合には、古老たちを中心にして、これまで培ってきた祭りや葬式など生活の経験に学び、その知恵によって震災被害を乗り切ろうとしています。

そういう人たちの為にも、研究の記録をしっかりとし、残り、情報提供し、今後を活用してもらえる場を作っていきたいと思っています。この仕事地域の人たちの、いささかでも支えになることを願うと共に、岩田書院さんが今後もずっと継続してくれることを信じて、一層力を尽くしていくつもりです。

ありがとうございました。

高山京子氏

(元法務図書館勤務)

ご紹介いただきました高山でございます。

今日は大勢の皆様が集まり下さいます、有難く感謝申し上げます。図書館サポーターフォーラム賞を頂くのは、非常に光栄なことです。有難うございました。この賞は、社会に貢献した図書館活動に対して授与される

賞であり、身に余る名誉と思っております。なお、副賞として日外商品の図書も頂戴いたしました。こちらは『災害史事典』など、被災地支援の意味でも有益な図書が含まれておりますので、仙台法務局に寄贈いたしました。

私は法務図書館に約40年間勤め、13年前に退職しました。法務省の赤レンガ棟は、皆さんご存知でしょうか。桜田門の近くにございまして、明治21年に着工して約8年かけて建築された歴史的な建物です。その後、大正12年の関東大震災にもびくともしなかったのですが、昭和20年の大空襲では、内部がすっかりやられてしまいました。20年から23年の物資の乏しい時代に取りあえずの修理を加え、法務省が復帰しました。建物は年々古くなりましたが、文化遺産として残さなければいけないということで、平成3年から6年にかけて復元作業を行い、昔の姿に戻しました。現在の法務図書館は、その赤レンガ棟にあります。そこに落ち着くまでには、書庫の設計や図書の大がかりな移転など、多くの苦心もございました。

移転後もなく、平成10年3月に退職いたしました。退職後はいろいろなお話をいただきましたが、立法資料を刊行している信山社にお世話になることにしました。法務図書館に長くいたとは申せ、信山社には本当にベテランの方もおられ、私は勉強の毎日でした。資料がいかに

大事かということにも気がつきました。信山社にいる間、毎日のように国会図書館の憲政資料室などに出かけて、明治の先人の残した資料を沢山見ました。

そんな時、思いがけず法務省の方から、「いわゆる未整理図書がダンボールが42箱あるので、検討してほしい」という連絡をいただきました。42箱の存在は、在職中に知っていました。その内容に触れたことはありませんでした。司法法制部に出向きますと、「ダンボール箱の中身を点検し、整理すべきかどうかを判断してください。整理の必要はないという結論になれば、廃棄する予定です」と言われました。私は自分でどうしたらいいのかもわからないまま、「点検してみます」と答えていました。心の中では、「廃棄されてしまったら、資料は二度と戻らない」という思いが湧いていました。

今日は藤井祥子さんがお出でになっていますが、藤井さんは、宮内庁書陵部に長年勤務され、古文書にも詳しく、私の尊敬する友人です。「藤井さん、こんな話があるので何とか手伝って頂戴」とお願いしました。また、専門性の高い仕事ですので、早稲田大学講師の小沢先生や、慶応大学の院生でいらした出口先生にも「お金は払えないけど、ともかく来て欲しい」とお願い致しました。皆さん交通費もなしで大変な思いをして、2年間頑張りました。その内、法務省

の方でも状況を理解され、私にお金が出るようになりました。しかし、6人位院生の方がお見えになると、お金を割ってお渡しするのですが、お弁当が出るか出ないか位の金額でした。それでも資料の整理の方は、だんだんと捗り出てきました。

幸いなことに、平成13年3月6日、法務省赤レンガ棟に特別顧問室が出来ました。当時は、民事訴訟法の三ヶ月章先生と、今日お越し頂いています。刑事訴訟法の松尾浩也先生のお二人が特別顧問で、私は両先生の秘書を務め、併せて整理作業に従事することになりました。非常勤ながら法務省職員に復帰しましたので、周囲の見る目も違ってきて、作業は軌道に乗ったということでございます。

今日は、國學院大学の高塩先生も御出席下さっています。先生は、日本法制史の大家です。先生のお力も借りたいと思い、「お金は出せないんだけど、徳川禁令考など、徳川時代の法令集の整理の部分をお助け下さい」と、直接お電話して頼み込みました。このように、人と人との関係で整理作業が進み、法務図書館の目録が完成したのでございます。完成した目録15冊は、この部屋の後ろの方に展示されておりますので、どうぞご覧になって下さい。

もしも私が、「この仕事をやりなさい」と今言われたとしましたら、それは到底お受けで

きません。あの頃は私にもまだ情熱があり、夢があったのです。周囲の人たちからどのように評価されようと私はやるのだ、一生懸命最後まで成し遂げるのだという気持ちで励んできました。気持ちが荒れたこともあったようです。藤井さんは、当時を回想して、「あなたは鬼のようだった」と言われました。

皆さんにご迷惑をかけましたが、その時参加して頂いた大学院生の方たちは、揃ってご立派になりました。すでに大学で教えておられた小沢先生は札幌学院大学の教授です、また、法政の院生だった宮平さんは流通経済大学の教授に、慶応の院生だった出口さんは桐蔭横浜大学の准教授に、神野さんは武蔵野学院大学の専任講師に、児玉さんは舞鶴工業専門学校の専任講師に、それぞれ就任しております。中網さんは早稲田大学法務教育センターの主任研究員です。皆さん学者として活躍しておられるわけです。私はとても嬉しく思っております。また、これから多くの方がこの目録を使って良い論文を書いて下されば、嬉しいことです。目録ができれば、永遠と未来、現在そして過去、それらが全部つながるのではないかと思い、夢に向かって仕事をしました。

今日は、未来社や信山社の社長さん、印刷を担当して下さったヨシタ印刷の北原さんや藤井さん、国立公文書館の鹿島さん、それに松尾先

生、高塩先生、出口先生など、多くの方にお出でいただきました。皆さんに見守られながら、こうした立派な賞をいただくことができ、本当に幸せと思っております。有難うございました。

4. お祝いの言葉

松尾浩也氏

(法務省特別顧問・東京大学名誉教授)

ご紹介いただきました松尾浩也でございます。今日はこの第13回図書館サポートフォーラムにお呼びいただき、お祝いの言葉を述べる機会を与えられまして、光栄でありますとともに恐縮に存じております。

受賞された三人の方のうち、高山さんの仕事については直接に知っておりましたが、他のお二人については、今日ご説明をいただき、また本人方のお話を拝聴しまして、河塚さん、飯澤くん、それぞれ大変立派な仕事をされ、優れた業績であって、まさに表彰に値すると思いがら、お話を聞いた次第であります。

このように言葉を述べるのは大変恐縮だと申しましたが、ご列席の皆さんは図書館の仕事に

ついて非常に精通しておられ、長い間図書館の仕事をして来られた方も少なくない、相撲の番付で言えば、横綱、大関のような方たちの集まりです。一方、私はその分野で何も足跡がない、いわば幕下のようなものでございまして、どうやって高い所からお話をすればいいのか、非常に恐縮する次第でございます。

ここに出席しましたのも、もっぱら高山さんとの関係でありまして、先程お話にありましたように、ちょうど10年前の平成13年春、私は法務省で特別顧問に就任しました。私より先に民事訴訟法学者の三ヶ月章先生が、やはり特別顧問になっておられまして、特別顧問が二人に増えました。法務省ではこの機会に部屋を作ろうということになったようです。桜田通にある赤レンガの明治28年に出来たという古い建物、そこに「特別顧問室」が出来ました。

部屋ができてみるとやはり忙しく、秘書が任命されることになりました。特別顧問二人の平均年齢は、その当時75歳でありました。秘書にも相当貫禄がなくてはということになりました。まして、法務図書館を定年退職しておられた高山さんが選ばれ、特別顧問室秘書になられました。先程のお話からもわかりますように、高山さんはダンボール42箱と取り組むつもりでいられて、そこに併せて特別顧問二人が入って来た訳です。高山さんの関心はその後10年間、42対

2の割合でダンボールの方に向いていた訳です。

今回も、「こういう表彰制度があるので、私の仕事表彰に値すると思えば、推薦状を書いて下さい、思わなければ書かなくて結構です」というのが高山さんからの話でした。私は推薦に値すると思いました。早速パソコンに向かって推薦状を書いた訳です。その後、かなり時間が経って、半ば忘れかけていましたら、最近になって「表彰の対象になりました、ついには4月11日に式典がありますので、それに出席して下さい」と言われました。出席すると答えましたが、今度は3日程前に、式典に出たらお祝いの言葉を述べるように言われ、それはないでしょうと思いながら今日に至った次第です。

私が図書館というものに、強い関心を抱いたことは何度かあります。その第一は、昭和29年の春、私は東京大学の助手に任命されました。辞令をもらいまして、その足で図書館を見学させるということで連れていかれたのが、法学部の付属図書館でありました。当時はエレベーターもなく、階段を上って私の専門である刑事訴訟法の書棚に行きました。そこには、今まで名前を聞いただけの、あるいはちょっと見ただけのドイツ、フランス、イギリス、アメリカなどの専門書が配置されておりました。本当に、宝の山に入ったという感じがしました。

それから約10年がたちまして、私はフルブライト研究員に選ばれ、アメリカのミシガン大学で勉強いたしました。そこにも立派な図書館がありました。それ以上にそこで認識したのはライブラリアン、図書館員という人たちが大きな仕事をし、また尊敬を受けているということでした。今日もお話を聞いておりますと、河塚さんは大学で専門に講師をされているようですが、ミシガン大学でもライブラリアンは、教授たちと対等の立場で議論をし、学生に対して法律の文献の扱い方を指導していました。非常に優れた人たちで、いろいろな国から来た留学生たちにも熱心に対応していた姿を今でも思い出します。

日本に帰りまして私は、駒場の教養学部で教えていましたが、その後本郷の法学部に移りまして、定年まで勤めました。同じ所だけありますと経験が限られたものだけに終わってしまいますが、定年後、上智大学や慶応大学に非常勤講師としてお世話になりました。図書館も利用させてもらいましたが、図書館というのはそれぞれに特色を持つと感じました。

時代の変化の中で、図書館業務も、変わってきたと思います。昔の図書館は、司書の人たちは静かに整然と並んでいましたが、今の図書館では司書の方が自ら動き出しているという感じがします。かつては植物のような印象でしたが、

今ではむしろカゴから出された鳥のように、あるいはウサギのように跳ね回るのが、新しい司書の姿ではないかと思われま

す。今日はこういう会に何うことが出来て、大変有難く思っております。皆様のますますのご活躍を祈りまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

文集

俳句八句

山内 明子

ストーブよし声に確認して発てり

ふぐ鰯干す河豚水槽に貼付けて

菓子食ふやマスク外さず引張って

歳晩や巫女アルバイト既婚者可

鰯大根煮て冷ますこと三度で完

相性よき酒と落味噌私とも

花菰君とたたむや近づきつつ

地震酔いの自己治療法ビール飲む



本は読むものか書くものか

井上 如

残さなければ沽券に係わるとでも言いたげである。例えば、

1. 本を読んでいて、むつかしいところにぶつかっても、わたしはやきもきしたりはしない。一突き二突き、あとはほっておく……この本がいやになれば、あの本をとり、何をするのもじゃまくさいときしか本に熱中したりはしない。(ミカエル・モンテーニュ)

2. わたしたちは、あれは読んだよ、というために読むのである。(チャールズ・ラム)

3. 新聞は世界中で、いちばん便利なものだ。読むことだけはできないが、ほかのことになら、なんにでも使える。(ジョン・スタインベック)

4. 私は書物の中で、私がかって生活の中で聞いたことのないような思想に出会うということは稀であった。(マキシム・ゴーリキー)

この中の、特にゴーリキーの言葉などは、一冊の書物を読みこなすよりも、世の中という大きな書物を読み解くことの方がずっと大事だ、と言う意味の、まことしやかな発言として人口に膾炙していると云えるだろう。

5. 本なんて読まないで済むんだったらそれに越したことはない。

という意味のことは、後に民博館長になった梅棹忠夫氏も若い頃口にして、言論界の矚目を買ったことがあるらしい。その梅棹忠夫氏について、京都大学の桑原武夫教授は、もちろん彼はたくさん本を読む。素人はかれの天邪鬼に目を奪われるだけだと言って擁護していたが、出所は忘れてしまった。

しかし筆者としては、モンテーニュから梅棹忠夫氏まで、これら一連の大御所の発言はどうも腑に落ちない。糞にたかる蠅のような筆者がいまさら異を唱えてみたところで始まらないが、むしろたとえば次のような発言、

子どもなどが部屋に閉じこもって本ばかり読んでいると、親が心配してどこか身体でも悪いのじゃなからうかと氣遣ったりする習俗は、留学生で何度か実際に経験したし、日本にも昔からもちろんある。寝コロンビア大学では、外国からの留学生に対して米国の生活に慣れさせるためであろうか、大学が手配したホーム・ビジットが頻繁に行われ、日本を出発する前に、アメリカン・クラブで再三再四開かれたオリエンテーションで聞いておいたことがズバリ的中して、日本から持参したお土産を家庭訪問でほしいへん有難がられ、面目を施したことであった。さる家庭で、筆者が図書館司書だと聞いたその家の父親から、うちの子は本ばかり読んでいて心配だ、という話を持ちかけられ、大いに賛意を表することで答えを誤魔化したことも覚えている。

一方、世界の先哲ともなると、読書の悪口には事欠かない。このことに関して何か言葉を

6. 私が小説を読みたいときは、自分で小説を書き上げてしまう。(ベンジャミン・ディズレイリ)

の方がパンチも効いていて、よっぽどしつくり来る。あるいはさる自費出版専門の出版社の見え透いた広告文だが、本は読むより書く方が10倍楽しい[〃]の方がより直截で、事柄の可否はともかくとしてたいへん判りやすい。

今、筆者が何を言いたいかと言うと、「読む」をそれだけで云々して「書く」と対比させて論じていない発言はすべて眉唾と思つて良いと言うことだ。なぜなら、読むことと書くこととの間にある超え難い *Crevasse* を見落としているから。このことと関連して、昔からある「矛盾」ということばの由来がここで有効だ。韓非子を出典とする中国の故事に曰く、

昔、中国の楚の国に、矛と楯を売るものがあり、この矛はどんな楯でも突き破ることができ、またこの楯はどんな矛でも防ぐことができる。と自慢していたが、あるひとに、お前の矛でお前の楯を突いたらどうなるか[〃]といわれ、答えに詰まったという。

こういう議論の仕方は逆説(パラドックス)と呼ばれる。典型的な例として、論理学の入

門書にもよく出てくる、すべてのクレタ島人は嘘つきである[〃]とあるクレタ島人が言つたときの、それを聞いた相手の困惑がある。これとか、上記の「矛盾」の由来のようなのは、逆説論の中では単純で初歩的で、「自己矛盾」とか「自家撞着」とか呼ばれている。現在この「逆説」

の典型的な例示は、経済学分野を筆頭に、ビジネスなどで使われる意思決定理論 (decision theory)、生物学分野など、世界中で合わせて200を超えるものが同定されていると言われ、自分自身でなく相手の主義、主張、信条などの矛盾点を見つけて一発でやりこめる武器として有効である。また、矛盾論というものも、毛沢東のような訳知りに教えて貰えば、大変わかりやすく書かれていることは誰でも知っている。また、自己矛盾を知るのに何も世界中を見渡すには及ばないのであって、我が国の代表的哲学者、ゲゲの鬼太郎じゃなかった、西田幾多郎の唱えた「絶対矛盾即是自己同一」を思い起こせば良い。広辞苑の第6版や日本国語大辞典の編纂者は、不必要に物を難しく取る癖があるらしく、この国民的語彙を恐れ戦いて採録していないのだが、要するに、絶対的な矛盾は他人を頼って聞いてみても始まらない。自分で考えるしかないのよ[〃]と言っているのであって、つまり、上記のベンジャミン・ディズレイリと同じことを言っているのだ。

しかしそんなことをいまさら司書もどきの皆さんに向かつて説いてもそれこそ始まらない。本論に入る。言いたいことは次の三つである。

○「読む」ことばかり口にして「書く」ことに口を閉ざしているのは、物書きか、物書きもどきの、「読む」と「書く」の間の決して越えることのできないクレパスの存在を知らないか、知つていても知らないふりをする極楽トンボというか、能天気というか、そういう手合いはとにかく無視するに限る。上記に挙げた例でも、ディズレイリはイギリスの首相も務めた大政治家だが、あとは要するに物書きでしかない。

○人は自分の声をいちばん感動して聞くと云われるように、自分の書いたものをいちばん感動して読むことができる。どうしても何か読みたくなったら、自分が書いたものを読むのが大人のやること、つまり、また君子ならずや[〃]だ。

○この世には、読む必要はないが、どうしても手元に置いておきたくなる本というものが存在する。これを「好事本[〃]」という。読まなくていい、持つてただけでいい。そうだ、そ

れでいいのだとなると、天才バカボンの親父じゃないが、目の前に今まではゼンゼン違う別世界が開けてくるから不思議だ。「西洋好事本展覧会目録」、略して「好事本展」のことは、本の神様、丸善本の図書館館長の故八木佐吉翁が「書物往来」の中で次のように書いてある。曰く、

あの「好事本展」は昭和12年5月に丸善本店で……催した楽しい洋書展示会であつた……陳列された500点ほどのほとんどが、たちまち予約済みとなつてしまつたのであるから、商売の愉しみも伴つていたにちがいない……さて、その好事本とはいかなる種類の書物であるか……などと開き直るほどのことはない。いわば、読んでも読まなくてもよいが、なんとなく自分の書架においておきたくなるような本である、と。

今思えば、八木さんは、書物に対してすべて好事本として接することによって自分を磨き上げた人だった。好事家だった。「本は読むものですか、書くものですか」と聞いたらどんな返事が返ってきたか想像するだけで楽しくなる。



うたびと
詠人に「アート」を想う——『栗明純生歌集』三巻から

恵光院 白

いささか旧聞に属するを先ずはお許し頂くと
して、過年、畏友栗明純生（クリアキ・スミ
オ、一九五〇年）兄から第三巻目の歌集（＊
後掲）の惠送を受けた。短歌、俳句などについ
ては中高生の時代を遠く過ぎて万葉集以後のや
まと心の受け入れに、永く心をハズしてきた筆
者ゆえ、その資格を事前に質されるべきだが、
先ずはこの歌集の中のアート（＊＊注）とその
周辺に注目してみたい。この短歌集が、それに
相応しいか否かは紹介者には判断外であるが、
歌集の第三巻目ともなれば、詠み人とその作品
に然るべく接するべきと考えるのが、紹介者の
今である。なかなか美術、芸術への心の次なる
空間、事象に対する機会の少ない我々としては、
先ずは現場からのその先の広がりを受け取るべ
し、と思うに到っている。

通例、我々の美術系の仕事では美術や展覧会
について一般の人と接して、作品評や展覧会感
想、美術一般の話を直（ジカ）に聞くという

場面は残念ながらあまり無い。多忙だからであ
ろうか、或いは人それぞれという領域だとする
風潮（本当はそうとはかりは言えないのだが）
だろうか。そのよう機会があるものなら、逆
に美術の見方など僅かな蘊蓄で白い雰囲気にし
てしまったり、また妙なお説を持ち出して響
をかったり等、ままだる。現在は多少改善され
て、公開的なアンケートやギャラリートーク、
評価委員会などの制度も広まりつつあり、色々
な考えに接する機会は多少用意されて来てい
る。しかし入館者数の多寡の次元とは無関係に、
美術館や展示品の現場で働く人ではない人の話
から、美術作品、展覧会からのその心など、も
う一つの大きな世界を、別の方法で知ること
必要であろう。夏目漱石の展評、井上靖の著文、
吉田秀和の随想、広くは文筆家による画家評伝
など、色々な例も挙げられよう。
以下では仮に歌材（モチーフ）のジャンルに
分け、頁の面から行間を詰めて表記した。第

一、二、三歌集と仮に配したが各ジャンル内に全
てを掲出したわけではない。詠者による章のタ
イトルは省略し、ジャンル中では掲出頁の順、
（カッコ）表記は本文頁ではルビであり、・印
は紹介者による。いずれも了とされたい。

＊『銀（しろがね）のハドソン』（第一歌集）

本阿弥書店 1996（平成8）年11

月、181P、21cm、堅装本、2,500円

＊『黄のチューリップ』（第二歌集）

角川書店 2001（平成13）年6

月、137P、21cm、同本、同右円

＊『グローバル・スタンダード』（第三歌集）

六花書林（発売・開発社）2007（平成

19）年 3月、152P、21cm、同本、同右

円 ☆いずれも国立国会図書館所蔵

＊＊注・アート＝形・象、色・彩、音・曲、技・

芸等による異次元創出／新空間表現、眼差し、

内意。

★絵画、平面系作品

●ローランサンの夢見る少女を眺めつつ癌セ
ンターに呼ばれるを待つ

●ラファエロの聖母のごとくうつつむきて鼻梁
は春の雪のスロープ

● 薔薇抱き呆と哀しき眼にて佇つカシニョー

ルの絵を視ており旅に

● そう君はカシニョールの絵の貴婦人のあの
眼して我を見つめき (以上第一歌集)

● 衣(きぬ)ならば紫の絹ラファエロの未生
の天使さやかにあえぐ

● カンバスに閉じ込められて薔薇色の少女は
ほのか笑みを浮かべて

● ターナーの部屋に通ずる壁ごとに掛かる小
さな金のプレート

● 演奏の間(あい)にもらいし塗り絵置きバ
イオリンとるジプシーの娘(こ)は (以上第二歌集)

● 〈キスミー〉の額に笑むモデル誰ならん
五十余年を若き日のまま

● シャガールの美術館にて珈琲をすすりつつ
ずつと想うデフォルメ

● いくたびも写真に見たるモナリザの前にこ
の美をついに解せず

● 永遠の「謎の微笑み」の絵の前にわれにも
謎の笑みはあらんか

● 旧約に背くと知りつつ描きけん金泥(こん
でい)を背に輝くイエスを (以上第三歌集)

★彫刻、立体系作品

● 三万個の真珠でその身包みたり吐蕃の菩薩
腰くねらせて (以上第一歌集)

● 十一面観音に向きつくづくと見おり大悲を
秘むるといふ面(おも) (以上第二歌集)

● どの神も金運の神、満艦飾におわせば祈る
馬祖さまの前

● 銚かざしいま投げんとするポセイDONの昂
ぶるペニスを包皮はおおう

● 紀元前五世紀にしてぼつちりと少女の像の
ピアスの孔よ

● 幾人を殺めたりけんアルカイック・スマイ
ル浮かべスフィンクスは

● 三原橋の小公園に「夕映え」の少女の像の
遠き眼差し (以上第三歌集)

★建築、庭園、インテリア、都市景観

● 拒むごと我を圧する摩天楼いくたびか来て
今日の違和感「マンハッタン・引用者注」

● 仕上げにとかねて用意の応接のカーテン引
けば展く庭園 (以上第一歌集)

● ビル、ホテル、レストラン、パブ、バー、
カジノものみな株にならざるは無し

● 輝ける明日を示すや摩天楼ひしめく香港、
塔婆のごとく

● 「原注、一九九七年香港返還」
御しがたきわが胸内と語りそむピョートル
宮の噴水見つつ

● 「原注、サンクト・ペテルブルグにて」
ヒースローのくすむレンガの窓辺にも猫の
刺繍のカーテン白し

● 立ちつくすレーニンの像遙かよりソビエト
の貧しきアパート見下ろす

● アラビアか、はたデイズニーのお城かと思
まがう丸屋根ここクレムリン (以上第二歌集)

● 噴煙に包まれ崩るる摩天楼ソドムとゴモラ
は主にぞ討たるる

● 聖戦(ジハード)にあれば異教徒六千の犠
牲に高く笑うその神

● 明治期にその名を残すグラバーの邸に繚乱
たり石楠花は

● 個室より間近に見下ろす議事堂の蒼白の面
(おも) 暗闇に浮く

● オレンジに輝く灯の塔またたきてのぼる緑
の螢一基は

● 朝は銀、昼は水色、夕暮れは鈍色に染む東
京湾は

● 山裾にへばりつくがに広がる人家あまね

く白壁の街「原小題、行頭右、アテネ一望」
● 交詢社ビルはバーニースとなり果ててマネ
キンの寝るショーウィンドウに
(以上第三歌集)

★寺院、神殿、遺跡、モニュマン（記念碑）

- ガウディーが託せし夢を三世紀かけて継ぎ
ゆくサグラダ・ファミリア
- 今はただ砂漠の下に静もれり幾万の夢紡ぎ
し楼蘭
- チンギスは毀しチムールは造りたり空より
青き廟の丸屋根
- 法然院の緑樹の蔭に乱れ咲く大きな石楠花み
だらに紅し
(以上第一歌集)
- どこか戦後の匂い残せし忠霊塔のあたりい
まは桜の名所
- この門の庇が青丹なるほど「あおによし」
とはこのことならん
- おごそかな面（おも）に十字をきる人ら縫
いて祭壇めぐる我らは
(以上第二歌集)
- 赦すまじ原爆という虐殺の跡地に今朝は白
き雨降る
- ソクラテスがプラトンが踏みし大理石の摩
滅もゆかしわれも踏みゆく「原注、パルテ
ノン神殿」

★音楽、歌謡、楽器

- 葉の花はコリントスの廃墟飾りいて真紅未
練のアネモネ一花（いつか）
- 横なぐりの吹雪の襲うブルーモスクにツ
アー客らは互いを窺う
- いさぎよきイスラムのモスク礼拝堂に聖像
なくて清（すが）しミフラブ
- 「原注、ミフ：はメッカの方向を指す壁の窪み」
創生の神の悪戯かカッパドキアの茸岩に倚
る乗客はみな
(以上第三歌集)
- 首ひねり「この人風邪？」ときくわが子（い
としのエリー）テレビに流れて
- 指を吸う癖なお抜けぬわが娘（こ）なりバ
イオリン持てば凜として立つ
- 譜面たたき娘に指示するその声に猛る棘さ
え愛という妻
(以上第一歌集)
- 押さえいる透くほど白き指先をかすめつ黒
きバイオリンの弓
- 応援歌に「久遠（くおん）に蒼く湧く潮（し
お）」の関門海峡秋日まぶしも
- 首領様に捧げる歌よ高らかに少女ら清く弾
む歌声
- 底ごもるボリュウムに響く舟歌にボルガな
らざる河のぼりゆく

★文芸、演劇、工芸、他

- ハンガリー舞曲奏ずるジプシーの娘（こ）
は風琴の兄を従え
(以上第二歌集)
- 旅立ちの朝も弦弾く子の髪ゆひとすじ長し
銀のピアスが
- たゆたいてやがて流るる「花の歌」鍵盤を
はしるその指の先
- パンジーの花弁のごとき声ふるえすぐに後
追う鍵盤のおと
- 旋律の昂まる時に一瞬の快楽（けらく）の
表情眉ねにしわ寄せ
- スカボロフェア低く流るるカフェーにて暮
るる夕日に街は溶けゆく
- 午前五時手探りに押すオーデオよりかす
かに聞こゆ「湖畔の宿」が
- 小春日の銀座通りは人あふれインデオの
リズム軽やかに流る
- クラシックはたジャズさえも師の家に倦む
こともなく語り続け
(以上第三歌集)
- レ・ミゼラブル終演ののちジャヴェールが
エイズ基金を募るブロードウェイ
(以上第一歌集)
- ひとことも日本語話せぬ五日目の夜は湯船
にわが歌詠う

●ごろごろとソファア、ベッドに転がれる脳裏に重し歌集一冊

●きりきりと力の限り締めたらんエカテリーナの太きその腰 「服飾領域・引用者注」

●二十五キロの金縫いこめし僧衣にて金色の来世語りしならん (以上第二歌集)

●明(ミン)は青、清(シン)は彩りあざやかに焼きし陶器の故宮に並ぶ

●息子との唯一の絆酔いしれても共に読みゆく「徒然草」を

●舞姫のエリスのモデルの消息に触るる文出(い)ず百年ぶりに

●ベネチアの信号が赤となるまでをレシート
の裏に下(しも)句書きとむ

●二年かけ少女の織(ほそ)き指先に紡ぎし
トルコブルーの絨毯 (以上第三歌集)

以上、ここでの採録は第三歌集の数が一番多く、また全三巻で掲出の本文計約四三〇頁、約一、一〇〇首中からの約七六首は約七%に過ぎない。またジャンル分けにしても、日本、東洋、西洋とか、神域系、市井系、異境系とか、大過去、過去形、現在形などの時制での捉え方、或いはゲーテのイタリア紀行に倣って路程の地名、遺跡や寺院、博物館、作品等々による区分も考えられよう。

それにここで紹介した七〇余首以外にも秀歌は先の三歌集に既に詠われてもいよう。三歌集においては詠者と共に状景と心象とが移動して行くものだが、ここでは対象(モチーフ)、動かない作品たちの周辺に詠者の心の位置や移ろいが見て取れる、という異空間的、異提示の場ともなっている。為に、右のようなデザイン(再配置)は詠者からは、要らぬお世話だと誹られるでしょう。

実際、各首のあらぬ虚空からの切り込みと構築性は変幻の最大の妙であり、しかも本来グルーピングには適さない一首たちが実に自律し、屹立し、一瞬を支配している様は、我らが怠惰な日常からすると、後光が差しているかと錯覚をおぼえる程である。それ故これら多首の、可否、是非、長短、虚実、粗密、妙／不妙などは、もともと読者に委ねるほかはない。

しかし逆に何やら方向が見えてきて、元気が湧く場面でもある。いうなれば春夏秋冬、年中行事、花鳥風月、天象偉観、山川草木だけでなく、都市空間、建造物や美術作品達も、充分に短歌世界と共に生きていると、いたく納得するからである。

米国まで飛び、人気歌手(故人)記念館でパフォーマンズはご披露しても、NYメトロポリタン博物館にさえ立ち寄らなかった、かつての某要人の感動したなんぞでは済まない(木村

要一氏の言)、次の世界が広く開かれているからである。グローバル・スタンダードや空母、新鋭機は誇示しないが、『万葉集』、絵巻物や五重塔、短歌や茶道を創出した我が国の、沽券の故にでもある。

つまり美術、作品に関わる我々の地平からすると、文芸、随想や短歌とは言わず、生き方のテーマとなるほどの作品、深く秘める感興や高い志への作品を、世に発表し、提供し得るか(美術作家、現代社会)、発掘し、評価し、保存し、遺しうるか(美術館、同前、以下同)、展覧会を開き、意味空間として展示しうるか(開催側、学芸員)、書架に作品集、解説書を並べうるか(図書館、美術資料室)、詳細を求められた時、デジタル下の諸資料の委細や画像を提供できるか(アート・ドキュメンテーション関係者)等を考えると、それぞれ何やら課題を示された場面と言えよう。

詠者の略歴については右三歌集の巻末に譲るが、「現代歌人協会」等の会員で、金融界という奔流の只中に身をおく激ビジネスマン、その風貌からは双方を感じさせないところが、歌詠の徳と謂えようか。家庭に於いては我が国古典歌集をかねてより子息君に読み解き、自らにあつては陸上・短距離走、テニスを嗜む、と聞く。歌集を辿つての限りながら、これからも枯淡ではなく、寧ろ外連味(ケレンミ)の在る歌

心で跋扈・飛翔してもらいたいところである。
読者にはこの三歌集を是非にも手にとられ、
詠み人の世界を追体験されて後、文芸作品群の
言葉から様々な造形世界についても読み解かれ
ん事を。また文芸とはいわず、他の音曲や舞踏
など非造形の領域に遊んで後に、造形世界との
対話へと辿られんことを。



パリでの「お呼ばれ」

岡田 恵子

昨年十一月、フランスの料理文化がユネスコの人類無形文化遺産リストに登録された。サルコジ大統領が二〇〇八年に提出していたそうだ。申請の目的がなんと、食へのある種の無関心に対して、活を入れることだと知り、ちょっとびっくりした。

ル・モンド紙によれば、フランスの美食は矛盾した状況にある。今日ほど料理や料理人が話題になったことはない。反面、今ほど家庭で料理を作らなくなったこともない^①と、食と文化遺産担当フランス代表であるピット教授(注)は指摘した。矛盾の核心は家庭料理と家族そろつての食事にある^②云々。

さて、今は昔となつてしまったが、このことに関連して思い出したことを綴ってみようかと思ひ立つた。

四十年ほど前、図書館学の勉強でパリに留学していたときのことである。知り合いの方がた

によく自宅に招かれて、昼食や夕食をごちそうになった。一年近くの滞在中、平均して週一回はだれかに招かれていたと思う。私が異国での学生寮暮らしであつたことへの気配りが感じられた。それと、フランスには日本よりも知り合いをよく自宅に招いて、社交の場を作る習慣がある。

ジャック・ロベールご夫妻は、パリ南の郊外にある住宅地、バニユーに住んでいた。庭に洗濯物が干してあつたのが、パリの街中では見かけない光景であつたので、のどかな雰囲気を感じた覚えがある。ロベール氏は元日仏会館フランス学長で、私の上司であつたから、渡仏前からそれはなじみが深かつた。

一家は子供が四人、お昼時には大学教授のご主人も、学校や幼稚園に通う子供たちも帰つてきて、揃つての食事である。今は子育て中も働き続けるのが普通となり、こういう家庭もまれ

になったことと思う。当時、学校に残つて給食を食べる児童は半数以下と聞いた。この家族には住込みの若いお手伝いさんがいたとはいへ、当時の主婦は、一家の昼食、それも手抜きのない料理を毎日準備するのだからなかなかにへんなことであつたろう。

夫人は愛らしい社交家で、とにかくおもてなし上手。ご馳走と団欒のあと、毎回私はフランス料理の手ほどきをしていただいた。私たちの作つた料理がその日の一家の夕食になる。

あるときは、夫人の提案で子どもの幼稚園に招かれ、折り紙を教えた。犬の顔ができたときの子どもたちの喜びようが脳裏に焼き付いている。夫人はパリの日仏婦人会である^③すずかけの会^④でもたいへん人望が厚く、後に会長に就任された。

パリのど真ん中、サン・ミッシェル大通りのアパートマンに住んでいたのは、ミシエル・ルシエご夫妻。ルシエ氏は研修先のパリ市庁図書館の館長だつた。夫人は昼間、やはりある図書館に勤めていて、夜の招待であつた。パリの夕食は通常八時過ぎとはいへ、きつと前の日から準備されていたのであろう。アール・デコ調の居間のとなりには、きちんとセッティングされたテーブルが待っている。ワゴンから次々と料理が運ばれる。ルシエ氏がワインを注ぎながら、

ウィットにとんだ冗談をとばされる。お料理もさることながら、話題に花咲く晩餐であった。

後年、夫妻を文化使節として三週間日本にお招きすることができた。東京での見学や、週末の旅行にお付き合ひできたおかげで、その後もさらなるお付き合ひを続けることができた。この夫妻を、パリの二両親様と手紙に書き出すほど親しくなれたことは、私にとってかけがえない喜びであった。

一方、生涯を独身で過ごされた年金暮らしのカランドローさんも、よく得意の料理でもてなしてくださった。留学の前年に団体旅行で来日されたとき、私は夏休みにたまたまその旅行団のお世話をしていたのだ。半年ほどして、そのとき撮ってくださった一枚の写真が送られてきて、パリにお越しの折にはご連絡くださいねとの言葉が添えられていた。この一行が何度もお招きを受けるチャンスをもたらしした。

アパルトマンの部屋や廊下は、アジア各地を旅行されたときの記念品で、さながらミューゼアム。お姫様が横たわるような年代ものの小さな赤いベッドも印象に残っている。最初に招かれたときは、話が弾むよう、図書館員の友人を相客として呼んでいてくださった。おいしいお料理に嘆息すると、日本人がお好きと思われるものを考えましたとおっしゃる。何という

心配りであったことか。私を気に入って度々招待してくれたのには、次のような理由もあったようだ。

あるとき、今の若いフランスセーズって、まったくひどいものだわ。立ち居ふるまいも着ているものもなんてこと！ あれでも女って言えるかしら……。私にはかつこよく見えたパリジェンヌたちであったが、七十歳を超えた彼女には当時の若者の風俗が嘆かわしかったのだ。日本人の若い女性には、まだたしなみが残っていると見ておられたに違いない。帰国してから十年近く、彼女が旅先のインドで客死するまで、私たちの文通は続いた。

私は日仏関係の仕事をしていたこともあって知り合いが多かった。留学生がみな私と同じように招待されていたわけではない。私も帰国後、時々自宅に外国人をお招きした。料理べたでも、うさぎ小屋でも、それが現実なのだから、ありのままを知ってもらいましょうと。

五十代以降になると、多忙になって気持ちにも余裕がなくなり、またいろいろな事情が重なって、ほとんどそれができなくなってしまう。しかしそんなことは言い訳でしかないであらう。考えてみると、パリで招いてくださったご家庭や料理に腕を振るってくださった方々は、多くが高齢、あるいは多忙であったはずな

のだ。生活上手と言おうか、知り合いや家族と家で食事を楽しむ工夫していたように思う。

習慣、あるいは料理上手ということもあらうが、夫人たちはほんとうによくもてなしてくださったといまでも感謝している。

（参考資料）「女性情報ファイル」（日仏女性資料センター）No.105, 2011. 2, p.14

（注）ジャン・ピエール・ピット氏は味覚関係の地理学者。フランス学士院の倫理・政治学アカデミー会員。「美食とフランス」（白水社）など著書の多くが邦訳され、たびたび来日して講演されている。

大連国際音楽倶楽部参加記 (二〇一〇年十一月)

門倉 百合子

♪大連国際音楽倶楽部のあらまし

「大連国際音楽倶楽部」は中国の大連市にある中山区少年宮を拠点として一九九四年に発足した、日中混合の国際アマチュアオーケストラです。少年宮というのは青少年に放課後スポーツや芸術を指導する施設で、中国各地に設置されているそうです。音楽倶楽部設立メンバーの一人Sさんは、四〇代半ばに大連に赴任した銀行員でした。学生時代からオーケストラでバイオリンを弾いていたので、週末にバイオリンを抱えて近くの中山区少年宮に通い、少年少女たちといっしょに合奏を楽しんだそうです。そのうち大学オーケストラの同期の仲間であるバイオリンのYさんやクラリネットのTさんたちが仕事で大連に赴任してきました。早速あれこれ集ううちに、数十人の中国の子供たちを中心とした国際アマチュアオーケストラが誕生したのです。名称に「倶楽部」とつけたのは、老いも若きも国籍を超えて皆で集って楽しみま

しょう、という趣旨の表れでした。

子供たちを指導していた中国の先生方も加わり、一九九五年十二月には第一回の演奏会を開くことができました。その後Sさんは帰国しましたが、残った仲間たちが音楽への情熱を引き継ぎ、指揮者には日本からTさんの師匠である鷺見尚保先生が参加してくだるようになりました。毎年演奏会を重ねて昨年第十六回となり、少年宮を経て大人になった中国のメンバーや音楽の先生方と、日本からのメンバーや駐在の日本人たちが加わってのコンサートとなりました。十六年の間には様々な紆余曲折があったそうで、現在は子供たちの参加はく大人ばかりですが、音楽を通じた草の根国際交流が毎年輪を広げてきています。

♪日本での練習

練習が始まったのはまだ暑い盛りの八月下旬の日曜日でした。私は何回か大連行きに参加し

たことのあるバイオリンのO夫人に誘われ、蒲田駅近くの練習場に着くと、三〇人くらいのメンバーが準備をしているところでした。ほとんどの方は別のアマチュアオーケストラに所属しているので、練習日が重ならないように祝日を中心にスケジュールが組まれています。鷺見先生の厳しくもユーモアあふれる指導が続き、ビオラパートは私のほか一、二名だったので、なかなか緊張する練習でありました。コントラバスを弾く夫を誘ったところ、最初は旅行だけいっしょに行こうかと言っていたのですが、やはり自分も弾いたほうが数倍面白いと悟って練習に参加するようになりました。練習の後は近くの大連料理をだす中華料理店に集い、これまでの経緯や現地でのあれこれをいろいろ教えてもらいました。年齢も職業も性別も様々な方たちが「大連での演奏会」ということで集っている場に参加するのは、これまでにない楽しみとなりました。

♪大連での練習

いよいよ出発の十一月二六日(金)となり、成田空港に昼前に集合。事前に日程や旅行の注意などを記したパンフレットと共に、「音楽家のための中国語入門」という自家製小冊子も配られました。現地では中国の方といっしょに演奏するので、いろいろな楽器名や音楽用語の中

国語も載っています。もっとも会話はできなくても筆談なら大丈夫なのでメモ帳も持参するように、というアドバイスもありました。

成田を出発し、朝鮮半島を斜めに横切つて大連へ向かいます。晴れていたので地上の風景がよく見えました。仁川を過ぎて海の上に出ると、直前に事件のあった島影らしきものを見ることができました。四時間程で大連に到着し、バスで市内のホテルに寄つて荷物を置き練習会場の中山区少年宮へ着くと、中国側のメンバーが揃つて音だしをしているところでした。現地です事をしている日本人も何人か参加していました。中国の曲は少年宮指導者の趙永波先生が指揮され、日本企業で働く中国人バイオリニストのNさんが通訳をしてくださいました。終わって隣の料理店で日中メンバーの交流を深めました。

翌日も午前・午後とみっちり練習をしました。中国側メンバーとは言葉は通じませんが同じ楽譜をみて同じ曲をやるので、初対面にもかかわらずなんとなく気心が知れてきました。昼食に配られたのは大きな肉まんが三つ入った袋で、皆で少年宮のベランダに出てはおぼりました。玄関ホール看板にはスポーツや音楽や舞踊などたくさんさんのクラスのスケジュールが掲示されていて、どのクラスも盛況の様子でした。

練習後ホテルに戻り夕食前の時間を利用し

て、旧満鉄本社のあった建物を見に行きました。ホテルから歩いて近くの中山広場ちゅうざんひろばに出ると、大きなロータリーの周りに立派な建物が並んでいます。その中の大連賓館（旧ヤマトホテル）をのぞいてから放射状の道の一つを進むと右側に目指す建物があり、現在は鉄道関係の機関が入っている様子でした。十一月末の大連は東京の十二月末くらいの気候で、冷たい風に思わずコートコートの襟を立てました。

♪本番と打ち上げ

翌朝バスに乗り込み演奏会場の大連第四十四中学に向かいました。広い敷地に立派な講堂があり、午前中はステージリハーサル、サンドイッチの昼食をとった後は着替えて本番です。客席には生徒やその親たちなのかたくさんの方がつめかけていました。当日のプログラム冊子の内容は次の通りです。冊子は中国語なので、わかる範囲で日本語にしてみました。演奏者は中国側約四〇名、在大連日本人五名、日本側三十三名でした。四番目の「熱巴舞曲」はチベットの曲だそうです。

大連国際音楽倶楽部第十六回交響音楽会

演奏曲目

- 一、「魔弾の射手」序曲／ウェーバー★
- 二、メモリー／ロイド・ウェッバー☆
- 三、映画音楽「カリブの海賊」☆
- 四、熱巴舞曲／方可杰☆

休憩

- 五、「フィガロの結婚」序曲／モーツァルト☆
- 六、交響曲第五番／チャイコフスキー★

アンコール

ボギー大佐／アルフォード…口笛独奏…
漆原紳一★
ラデツキー行進曲／シュトラウス一世☆

指揮…鷺見尚保★、趙永波☆

演奏…大連国際音楽倶楽部

日時…二〇一〇年十一月二十八日午後二時

会場…大連第四十四中学音楽ホール

主催…中山区少年宮、大連国際音楽倶楽部、

日本東京国際音楽倶楽部

協力…大連第四十四中学

終演後はホテル近くの料理店で、関係者が皆集ってなごやかに楽しく打ち上げをやりました。ビオラパートが集まったテーブルでは、駐在の方に通訳してもらって中国人ビオリストたちとたくさん交流する事ができました。怡幅のいい紳士は普段は家具店を経営しているとか、ビオラの首席奏者の奥さんはフィットネスクラブに勤めているとか、日本人の先生にビオラを習ったという若者は片言の日本語を話してくれました。楽器を取り出して日中入り乱れての演奏大会となったり、日本語が上手な年配の元チェロ奏者とおしゃべりしたり、なかなか貴重な体験となりました。

楽しいことばかりでなく複雑な課題もたくさんある倶楽部だということもだんだんわかってきましたが、今年も練習スケジュールが伝わってきたのでまた参加しようと計画中です。

演奏会場から眺めた大連の街



伊藤博文の「日の丸演説」

古賀 節子

近年、明治維新前後の歴史をテーマにした小説やテレビドラマが数多く書かれ、制作され、多くの読者や視聴者を集めている。しかし、それらが扱う視点は、いずれも日本の国内情勢に置かれ、世界史との関連で語られるものは少ない。また、日本の開国・明治維新というと、1853年、浦賀に來航した黒船と強く結びつけて考えがちだが、実は、それより遙か以前、百年位前から、ロシア、フランス、イギリスは、東アジアへの進出を企て、日本にもその脅威は及んでいた。

例えば、1768年、イギリスのジェイムス・クックが南太平洋探検航海に出発、1778年、ロシア・イルクーツクの商人、蝦夷地に上陸、1785年、フランスのラ・ペルーズ伯の東北アジア探検航海へ出発など、枚挙にいとまがないほど、欧米列強は東アジアへの侵攻を模索していた。また、それらの国々の国内状況に眼を転じれば、1775年、アメリカ独立戦争

が始まり、イギリスでは、ワットが蒸気機関による回転式エンジンの特許を得て、産業革命は本格化し、1789年には、フランス革命が起こり、世界は新しい秩序の時代へ突入しようとしていた。

このような世界情勢の中で起きた明治維新を、今、解明・理解しようとするならば、世界各国との関係の中で、世界史との関連の中で見つけることこそ必要であり、そうすることによって、正しく明治維新と近代日本誕生の過程が理解され、更には、日本が将来進むべき道も導きだすことができるだろう。

今、ここで紹介したい本は、まさにそのような問いに応えてくれるものである。

犬塚孝明著「海国日本の明治維新」
新人物往来社 2011年

本書は全体を、1771年のロシア船渡来事

件からほぼ一世紀にわたる幕末の国内状況を世界史の諸事件と関連づけながら、1871年（明治4年）の岩倉具視を全権とする遣欧米使節団派遣までの百年間のロシア、フランス、イギリス、オランダ、アメリカ各国のアジアと日本への進出の史実を、1771年～1843年、1844年～1858年、1858年～1864年、1865年～1872年の4期（4章）にわけ、それぞれの時期に起こった幕府内での混乱・議論・対応は勿論、諸外国の反応とその交渉の過程を総て史料に基づいて記している。著者の専門は、日本政治外交史・日欧交渉史で、「薩摩英国留学生」「明治維新対外研究史研究」「森有礼」「密航留学生たちの明治維新」など、幕末を中心とした著作が多数ある。

本書がこれまでの歴史書と異なり優れている点は、その時の人の言動、世の動きを、総て史料を基に説き、出典をあきらかにしている点にある。これまで多く出版されている歴史小説とよばれるものも、作家は、勿論、史料を渉猟して書いているけれど、本書のように、一人一人の言説・行動を出典をあきらかにし、一般庶民に分かるように、幕末を世界史の中で描いた著作は、はじめてだと思う。

刻々と迫る西欧列強のアジア侵略、その侵略の危機から日本を救うにはどうすればよいか。東北仙台の林子平の「海国兵談」から始まり、

軍事力に対抗するために軍備の近代化をす
め、そのために密航までして外国の知識・技術
の習得に努力し、国をあげて大規模な富国強兵
策をすすめる中で、西欧先進諸国の文物、制度
の調査研究のために官民を問わず海外留学、海
外渡航を奨励した。そして、1871年（明治
4年）の岩倉具視を全權とする遣欧米使節団の
派遣となるまでを描いたものである。

冒頭のタイトルは、本書の最終章に同使節団
副使伊藤博文が、1871年サンフランシスコ
でのアメリカ側の歓迎の際行われた「日の丸演
説」と呼ばれている英語の演説から取ったもの
である。（274頁～275頁）

「今日、わが政府や国民が熱心に望んでいる
のは、多くの文明諸国が享受している文明の最
高点に達することである。この目的にそってわ
れわれは陸海軍、科学、教育制度を採用し、さ
らに外国貿易によって知識は自由に流入するよ
うになった。わが国の改良は、物質的文明にお
いて急速ではあるが、わが国民の精神的改良に
はさらに大きなものがある。……今や、政府も
国民とともに、進歩という平和的進路へ向けて
突き進んでいる。中世において、戦争なくして
封建制度を破壊した国があるだろうか。……日
本は進歩することを熱望している。わが国旗の
中央にある赤い丸は、もはや帝國を封印する封

蠟のようにみえることなく、これからは、事実
上、このデザインが意味するように、世界の文
明国にあつて前進し、そして上昇していく朝日
のごとき気高い象徴となるであろう（伊藤博文
伝 上巻 英文からの拙訳）」

ここで伊藤は、欧米で用いられていた「封蠟」
（water）をたとえに、今、日本は赤い封印を
といて、国を開いて、昇る朝日のように間違
いなく進歩する。そのためにアメリカに來たのだ
ということ。「日の丸」を使って、英語で、理
念と自信に満ちた演説を行った。

この気概こそ、今、私たちに求められている
ものだと思う。アジア太平洋地域の自由貿易が
話題になっている昨今、現在より比較にならな
いほど情報量が少なく、世界の中の日本の地政
学的状況把握が困難であった時代を、先祖は叡
智をしばり切り抜けてきた。今日、日の丸が伊
藤の比喩とは逆に国を封じるものにならないよ
う、伊藤の演説をもう一度噛みしめ、日本の進
路を熟考する必要があるだろう。その際、本書
は幾多のヒントを与えてくれる。

最後にもう一つ本書について見逃せない点
は、各章ごとに作成された日本と世界各国との
関連年表と、普段余り目にしない挿絵が多く挿
入されていることである。冒頭に掲げられてい
るエカテリーナ2世の肖像画は、写真のない時

代に、おそらく聴いた話から想像で描いたもの
だろう。印象深い。そして、それが、現在まで
保存されていることも素晴らしい。また、それ
ら挿絵の所蔵館もいろいろで、我田引水になる
けれども、情報・資料（史料）を保存すること
の重要性が再確認される。

是非、ご一読を。

私でもボランティア

今 まど子

☆まど子のボランティア その一

三月三十一日の『読売新聞』の一面に、小さい女の子が震災で行方不明になったお母さんに手紙を書きながら、眠ってしまった写真が掲載されていた。この写真を見て、と胸を衝かれ、目を離すことが出来なかった。手紙には、

「ままへ。

いきてるといいね。

おげんきですか。」

と覚えてたのひらがなで書かれていた。手紙を書いた女の子は、昆 愛海（こん まなみ）ちゃんといい、四歳。昆さん！字は違うけど私と同じコンさんだ。

同じ写真が五月十日にも掲載された。この写真を見て心を動かされなかった人はいなかったのだろう。五月十日は愛海ちゃんの誕生日で五歳になった。

岩手県宮古市千鶏地区の漁村で、お父さんは

漁師だった。愛海ちゃんは地震があった時、保育園にいた。迎えに来たお母さんと自宅に戻ったその時に、津波に襲われ、両親と二歳の妹蒼葉ちゃんは引き潮にさらわれて、行方不明になったという。愛海ちゃんだけが助かった。今は、おばあちゃんと暮らしていて、保育園に通っている。

昆愛海ちゃんの写真を目にしてからは、震災孤児の新聞記事に注意してみるようになった。震災孤児とは、震災で両親が亡くなったか、または行方不明で、十八歳未満の子どもたちを言い、六月六日現在で二百一人（岩手県八十二人、宮城県百一人、福島県十八人）にのぼる。

私にも何かできることはないか、と新聞をめぐっていた時、「もも・かき育英会」の記事と創設者で建築家の安藤忠雄さんと発起人の一人ノーベル物理学受賞者の小柴昌俊さんの写真が目に入った。「桃栗三年柿八年」ということ

わぎにちなんで、遺児の成長を末永く見守っていこうというのだ。会員を集め一人毎年一万円ずつ十年間で十万円を寄付するのだ。集ったお金は被災地の教育委員会を通して、子ども達に支給される。安藤さんは阪神大震災の時にも、「桃・柿育英会」を設立し、個人や企業から五億円を集め、四百十八人の小中高校生を支援した実績があるそうだ。

これだ！と閃いた。これなら愛海ちゃんにも間接的に支援が出来ると考え、申し込みをした。でも十年、生きられる？ その時はその時だ。下記へ申し込みされると、一週間位で書類が送られてきます。

申し込み先

〒531-0072

大阪市北区豊崎二一五-二十三

安藤忠雄建築研究所内 もも・かき育英会

電話…06(6371)2227

Fax…06(6374)6260

☆まど子のボランティア その二

「被災の図書館に本を送ろう／三陸地域の文化再生に」と言う、六月十九日の『読売新聞』の見出しに、司書である私は気がついた。柳田国男の「遠野物語」刊行百年を記念して、今年四月に「遠野文化研究センター」が設立された。

所長は東日本大震災復興構想会議の委員でもある赤坂憲雄さん、顧問には、宗教学者の山折哲雄さんや作家の高橋克彦さんが名前を連ねている。

センターは、被災した沿岸地域の図書館や学校図書室を再建しようと、百万冊を目標に図書の寄付を募っている。集める図書の分野に制限はないが、雑誌、漫画、文庫本は除く。図書は新しいに越したことはないが、中古でもあまり状態が悪くなければよいとのことだ。

送り先

〒028-0515

岩手県遠野市東館町三一九

遠野市立図書館内

三陸文化復興プロジェクト係

電話…0198(62)2340

☆☆☆まど子のボランティア その三

今回の大震災と直接関係はないが、「使用済み切手集め」である。

このボランティアを私はかなり長く続けているが、宅配便が広まり、切手を集めるのが難しくなってきた。私は、集めた切手をキリスト教系の団体二カ所に送っている。それらの団体の一つでは切手を換金し、その資金でアジアやアフリカに医師や看護師を派遣し、そこで医

療活動を行う費用に当てている。もう一つの団体は、社会福祉活動が主な仕事で、社会福祉、臨床心理、精神医療などの分野の専門家たちがチームを組んで、問題の解決に当たったり、勉強会なども行っている。

どんな切手でも、一枚でも、同じものでもかまわないので、おついでの方に、日外の森本さん、岩本さんに預けて下さっても、私に手渡し下さっても、送って下さっても結構ですので、お願いいたします。

住所

〒150-0012

渋谷区広尾一ー三十五ー七〇五

今 まど子

電話…03(3498)7578



BAA創立30周年

末吉 哲郎

わが国初のアーカイブズ団体

BAAといってもピンとこない向きもあるかと思うが、企業史料協議会の英文名略称である。二〇一一年で創立30周年を迎えるが英文名は当初からBusiness Archives Associationと称しており、アーカイブズを英文名とはいえわが国で称した最初の団体である。

なぜこの団体が発足したか。一つには各企業で創立百周年を迎える事例が多くなり創業百年史の刊行が多くなったことがある。これに専ら図協が社史セミナーを開催したり、社史ユニオンリストを作成するなどして社史資料に早くから注目していた。一方一九六六年に経団連新館が大手町に建築され、その8階にはほぼワンフロアのスペースで小生の勤務する経団連図書館が設置された。そして広い閲覧スペースを利用して企業の広報資料などの資料展示会を開催したが、その一つとして「会社史展示会」を数度に亘り開催して、大勢の来館者があった。

しかしながら当時専門図書館は現時点での情報収集管理やドキュメンテーションの方に重点が置かれており、企業の歴史的資料の管理やアーカイブズに力をさく余裕がなく、別途専門団体を立ち上げたかどうかという意見が多かった。一方産業史や経営史関係の学者の間でも産学共同でのビジネスアーカイブズ研究の気運が高まってきた。

そこでこれらの動きをふまえて一九八一年十一月に企業史料協議会が発足するわけであるが、準備段階での発起人として当時経団連図書館の小生の他、学者グループを束ねる日本経営史研究所の河上増雄氏、安田生命で百年史編纂の責任者をつとめた調査資料室長の中村頼道氏、そして大阪商工会議所図書館長で関西専門図書館の重鎮鈴木通保氏等が協議を重ねた。そして経団連会館で創立総会を開催したわけであるが、当時この発起人各位は四十才台で若さとして行動力でこの団体を立ち上げたといえる。

企業史料協の活動領域

企業史料協議会の主な活動領域は ①会社史セミナーなどを通じての社史研究 ②企業における歴史資料の収集保存管理方式の推進 ③企業博物館運営等を通じての歴史的設置製品保存管理研究 ④ビジネスアーキビストの養成などが主な柱であったが三十年におよぶ活動を通じてこれらの活動は企業を中心とするビジネスアーカイブズ活動として定着してきている。各企業においては社史刊行の都度資料収集は行なわれ、社史が刊行されると資料室は解散される状況であったが、最近ではアーカイブズ室として図書室とは別の歴史資料収集保存室として常置されるようになってきている。また全国各地の産業遺産の見学会も毎年実施され、各地域との交流が行なわれている。また欧州各国、アメリカの視察、中国档案馆との定期交流などを通じ国際交流も行なわれている。

三十周年記念行事の一つとして五月に国際文化会館を会場に国際シンポジウムを渋沢史料館と共催の形で開催した。テーマは「ビジネス・アーカイブズの価値」と題し、イギリス、フランス、デンマーク、アメリカ、中国、インドなど各国のアーキビストと共に企業史料活用の新しい動きを探った。秋口には各界の代表を加えた国内シンポジウムなども予定されている。

社史・企業博物館の推進

企業史料協議会は企業等の機関会員制度をとっており、個人会員も研究者やOBに限定して受入れている。BAAと略称しているせいか、理事会や総会等のあとのパーティーも盛んで、担当者同士の交流も活発である。



各国共このところビジネス・アーカイブズへの取組みは活発であるが、わが国の場合、その特色として社史の刊行点数は一万点を超え、また企業博物館も多彩で四百館に達しており、産業博物館として公立の博物館の及ばない分野をカバーしている。また国立公文書館や自治体の文書館との協力のもとに、わが国のアーカイブズの水準を上げる役割も果しつつあるのである。

この企業史料協議会の創立やその後の活動に献身的にリーダーシップを発揮された中村頼道副会長が本年三月に逝去された。同氏はビジネス・アーキビスト講座他活動の全般について力を尽くされていたが、最近では他のアーカイブズ団体との協力網づくりに熱心であった。五月に刊行された創立三十周年記念特集・（企業と史料第七集）の巻頭に「私と企業史料協議会の三十年」とする回想談をヒアリング記録の形で寄せており最後のメッセージを残した。心からご冥福をお祈りする次第である。

2011年6月11日

平井 紀子

6月11日、「東北大震災」発生から丸3カ月のこの日、私は仙台へ行った。当日は所属する学会の年次総会日であったが、はやくから仙台行きを決めていた。

仙台は、高校時代を含め約4年過ごした第二のふるさとである。兄家族が住んでおり、両親の墓もある。お墓参りを兼ねて年2・3度は仙台へ行っている。東北新幹線で2時間、日帰りでもき便利である。

いつもは、兄夫婦が霊園に先に来て、墓石を洗い花を取りかえて整えておいてくれる。私は駅前からタクシーで向かい、墓地で落ち合う。墓参のあとは、一緒に昼食をとり、兄の家へ行つて、5歳になるおしゃまな姪の成長を見るのが楽しみである。帰りは駅ビルの地下みやげ売り場で、好物の阿部の笹かまぼこと赤かぶ、長なすの漬物を仕入れ、あまり遅くならない便で帰る。これが定番のコースになっている。

兄の家は、仙台市青葉区にあり、震災当日は

連絡がとれなかったが、3日後に電話があり、幸いにも大きな被害はなく、家具、仏壇など家のなかにはハチャメチャで手がつけられない状況であったが、全員無事であると聞いて一安心した。後日、お墓の様子を聞いてみたが、墓の事務所は、まだ閉鎖されたままで、状況は不明とのことであった。4月に入り、再度確かめてみたところ、事務所は再開、墓地も被害はないことを知った。だが、実際にこの目で確かめ、兄家族の見舞いもしたく、遅くなったが、震災後、初めて仙台へ行くことにした。

この日と決めたのは、もう一つの理由があった。それは数少ない仙台在住の友人Tさんと会う約束していた。

Tさんとは、高校2年のときからの文集を作った仲間で、卒業後は東北大学の大学事務局に勤めていたが、いまは専業主婦のようである。お墓参りに仙台へ行くときは、連絡を取り合い会うようにしていた。

4月の末頃、彼女から電話があり、石巻に住む親戚が被害に遭い、手伝いに行っているという。私に頼みたいことがあるが、一段落する6月頃、会いたいとのことであった。

私は東京生まれであるが、根っからの東北人である。母の出身地は青森の下北地方であるが、秋田、福島にも親類縁者が多い。父の転勤で4年間仙台に居住したのも東北が私を呼び寄せたのであろう。私の体内細胞には東北人のDNAが深く刻みこまれている。今回の震災には心を痛めていた。

そんな折、5月の連休の頃、高校の同窓会「二華会」から「東日本大震災安否確認のご協力について」という安否状況調査の往復ハガキが届いた。おそらく全国に散らばっている同窓生に送られたものであろう。

震災による行方不明者が、まだ8千人近くいると報道されているが、様々な機関・団体が追跡調査を行っている。

はがきには、①震災でご自身がお亡くなりになられた方②お身内を亡くされた方③家の壊滅状況④仕事場が被災された方、などがアンケート形式に記されていた。私はさっそく東京在住であり、無事であったことを返信した。

仙台行きは、Tさんと兄の都合などを調整して、震災後3カ月の6月11日に決めた。

当日は、東京は雨模様のあいにくの天候であつた。東北新幹線の朝7時代の仙台行きホームは、混雑して長蛇の列で、ホームに待機している列車の各号車の最後尾がどこなのか、次の発車を待つ列なのか、わからないくらい人々が溢れていた。何でも乗れる列車に乗りうと、Maxやまびこ号に乗り込んだ。ちょうど震災から3カ月ということもあり、ボランティア風の人でも大勢いた。自由席も満杯で、Max2階の階段にしゃがみ込んでいる人もいる。

仙台駅で降りて、すぐ駅前のタクシーに乗り、墓地に向つた。墓地は、東北大学の山の方にあり、震災当時は、墓地の事務所は倒壊しかけていたらしいが、水道も使え、元のようになっていた。事務所から階段を上った高台の墓地には、ところどころに、まだ青いビニールシートで覆われた墓もあつた。山側なので津波の心配はなかつたが、地震の揺れの方向で被害の大小があつたらしい。事務所の階段を上ると、兄もちょうど車で到着したところで、二人で備え付けのバケツに水を汲み、墓の前に行ってみると、雨のせいか墓石はきれいに洗い流され、茶碗のお水と花を取りかえるだけで済んだ。

墓地の小高い丘から見下ろす仙台の街は、新録に囲まれて美しく、私の愛する仙台が一望できた。

兄とは墓地で別れ、友人と待ち合わせた場所

に向かった。

Tさんとは2年ぶりの再会であつたが、急に老けたように見た。彼女の生い立ちは複雑で、早くに母親を亡くし、石巻の伯母さんに育てられたらしい。災害では、何をおいても一番に伯母さんの家に行った。2階建ての1階は津波の水でやられ、傾きかけている2階で何とか生活しているが、仙台と石巻を行き来しているという。彼女は災害について、それ以上多くを語らなかつたが、他人には言えない辛い悲しいことがあつたにちがいない。

テレビなどの報道では、これでもか、これでもかと、悲惨な災害地の映像を映し出している。「もういいよ」と思うことがある。早い収束と復興を祈るばかりである。彼女の少ない言葉から、災害地の方が一日一日を懸命に生きていることを強く感じた。

私への頼みとは、「安否確認のはがき」の東京支部の調査の取りまとめを手伝ってほしいという依頼であつた。

同窓会本部の事務局は仙台の高校内にあり、東北一体を管轄している。東京支部は、東京のほか、静岡、長野などを含めた東北以外に在住している卒業生を対象としている。毎年4月には支部会が都内のホテルで開催されているが、今年はもちろん開催されていない。

彼女は今回の災害についての本部を手伝い、おもに宮城、秋田在住の同窓生の安否調査の分析・集計に当たっているが、私に東京支部を応援してほしいということであつた。東京支部の会長・役員は高齢で、細かい事務は、捗らないらしく、本部との連絡が取りやすい人物を探しているという。

「貴女しかないのよ!」

物静かな彼女が、私に投げかけた強い語気に圧倒された。面倒な細かい仕事だあと、ためらいもあつたが、「私がいま出来ること」「私にも出来ることがあるのだ」と引き受けることにした。

高校同窓会への手伝いが、今回の災害の実態究明・支援のひと滴になればと、思いを新たにした。

3. 11からの出発―東京子ども図書館の災害復興への取り組みについて

松岡 享子

あの日からすでに1カ月が過ぎました。みなさまは、今日までの日々をどのようにお過ごしだったでしょうか。直接被害に遭われた方々にはもちろんのこと、そうでなくても、このたびの災害によって、さまざまな形で悲しみ、苦しみを味わっていらっしゃる方々に、なんとかお見舞いのことをお届けしたいと願ってきました。でも、今はまだ気持ちがどーんと底の方に落ちていて、今何かを言おうとすると、ことばだけが先に行ってしまうような、気持ちがことばにしつかりついて行かないような、あやうさ、もどかしさを感じていて、うまくことばを出すことができません。何を言うにしても、時間がかかる気がしています。悲しみ、苦しみのなかにいらつしやる方々のために、何か具体的にできることをしていけば、そのうちに追々ことばも生まれてくるのではと思っています。

3月11日の直後から、東京子ども図書館とし

ては何をなさいますか、ぜひ何かしてください、東京子ども図書館が何かなさるなら、協力したいと思います、という声が、あちこちから寄せられました。だれしも抱く思いは同じ。あの惨状を知るにつけ、何かしなければ、じつとしてはいられない、という気持ちにみんなが駆り立てられていることがよくわかりました。

もちろん、わたしたちも何かしたい。でも、やみくもに動き出すことがよいとは思えない。たとえば、本を送るといふような、だれもが考えることにしても、どこへ送るか、だれに送るか、どんな本を送るか、送られた先でだれがその世話をするか、それが必要な人の手にわたる道すじがつけられるのか、等々、きちんと見通しが立っていないければならないでしょう。阪神淡路大震災のとき、大量の本の寄贈を受けたことが大きな負担になった図書館の例も聞いています。

すぐにも動き出したい気持ちは山々ですが、わたしたちは、少し時間をかけて、わたしたちにできることは何か、それをするためにはどんな仕組みや人、そして、どれだけのお金が必要か、そのお金をどうやって工面するかを、考えたいと思いました。この時点で、わたしたちの考えていることは、まだまだ具体的な計画とはいえないものです。それでも、今考えているところまでをお伝えして、みなさんからのご意見や、ご提案を聞き、それらを取り入れて、計画を練り上げていきたいと思っています。

事業の計画を立てるにあたって、わたしたちは、つぎのようなことを考え方の基本におきました。第一は、長い期間にわたって行うことです。被災地がほんとうに復興し、被災された方々が平常の暮らしに戻るまで、おそらく何十年もかかるでしょう。一世代ではすまないかもしれません。

ですから、わたしたちの計画する仕事も、その場かぎりのものでなく、継続して行いたいし、また、行えるものになりたいと思っています。10年を目途に、さしあたっては、3年から5年にわたる計画を立てたいと考えています。

第二は、東京子ども図書館がこれまでにしてきたこと、蓄えてきた経験を生かせる活動をし

たい、ということでした。たとえば、わたしたちは、40年近くにわたって、お話の講習会を実施し、全国に800人を超す修了生がいます。この人たちの力を生かすことができないだろうか。あるいは、わたしたちは、長年にわたっていい本を読み、子どもにすすめられる本を選んでブックリストを作成するという仕事をしてきました。その過程で得た知識を、子どもたちに本を送る事業を計画している他の団体や機関に利用してもらえないだろうか。さらにはまた、わたしたちは、2002年から3年間にわたって、伊藤忠記念財団と共同で、全国の文庫行脚を行いました。また、講習会でお訪ねしたお話のグループも全国にわたっています。機関誌の購読者、賛助会員の方々ともつながっています。これらの人のつながりをもとに、子どもと本に関わる活動をしている個人、団体の情報を集めようと、3年ほど前から「マップ」と略称している名簿作りをしました。これを生かして、なんらかの助けを必要としている人と、それを提供できる人とを結び仕事ができるのではないだろうか、といったことです。

第三は、すべての活動を人と人を結び形で行いたいということです。送る先の人の顔が見えないところに本を送るといったことはせず、必ず顔の見える関係を軸に動くことを鉄則にした

と思います。そして、できればその関係を一時的なものにせず、持続させたいと願っています。本を仲立ちにして人と人とつながっていくことは、わたしたちにとっていちばんうれしいことなのですから。

第四は、特別なことではなく、ふだんしていることをふだんどおりにやることを原則にしたということでした。わたしたちのする活動は、基本的には子どもに本やお話を届けるということですが、本を読んだり、お話を聞いたりすることは、災害時に特別にすることではありません。ふだんの生活のなかにあることです。被災地を訪ねて、本やお話を届けるにしても、それを1回こっきりの催しとしてやるのではなく、できれば持続する活動につなげる工夫をし、それによって生活のなかに「ふだんの暮らし」の感覚が戻ってくるように、またそれを機会に本やお話が日常の生活にとけこむようにしたいものだと願っています。そして、いづれ復興という枠がはずれるときがきたら、すべての活動が、東京子ども図書館のふだんの活動に織り込まれていくようでありたいと思っています。

以上のような基本的考えかたのうえにたって、さしあたっては、「マップ」に蓄えた情報や、わたしたちのもっている人的ネットワークを通

じて、また実際に現地を訪ねて、どんな活動がのぞまれているか、どんな活動が可能かをさぐることはじめたいと思っています。

比較的すぐにでもはじめられるのは、子どもたちに本を送る運動をしている諸団体に、本選びの相談に応じること、あるいは本のリストを提供することです。すでに『私たちの選んだ子どもの本』をはじめ、ブックリストがありますし、絵本に関しては、基本蔵書目録がすでに編集の最終段階にはいつています。資料室には他の団体、機関が出しているブックリストも多数あります。これらの資料をもとに、要望に応じたりリストの作成はできると思います。

また、被災した地域にいるブラジル人の子どもたちのために、わたしたちの豊橋市での活動の成果である日伯両方で読める『ブラジルのむかしばなし』と、ポルトガル語の解説つきの本のセットを贈ることもできます。

少し準備を整えてから進めたいのは、要請のあるところにボランティアを送って、子どもたちにお話やわらべうたを届けてもらう事業です。できれば、同じ人と同じ場所を複数回訪ねてもらって、子どもたちと仲良くなってもらいたいと思っています。これまで、長期、短期を含めた当館のお話の講習会の修了生、わらべう

た講座の受講生は、1000人近くにのぼります。また、そのお仲間は、おそらくこの20倍はいるのではないでしょうか。子どもたちにお話を語ったり、わらべうたで遊んだりするすべを身に付けた、これらの方々の、たとえ半数、いや1割でも、1回ずつお話訪問をしてくだされば、どれだけたくさんのお話の場が開けることでしょう。ただ、訪問は原則としてボランティアとして行っていただきますが、必要な方には、また、くり返し訪問する際には、交通費だけは助成したいと思います。このための財源が入用です。

ボランティアの訪問は、わたしたちが2006年度からはじめた「おばあさんのいす」事業の延長、あるいは発展した活動とも位置づけています。折しも、発足から5年を経過し、特別に「年度おばあさん」を委嘱して、その方たちに各地を訪問していただくことは、2010年度をもってしめくくることを決めておりました。これからは、広く各地の「おばあさん」に、それぞれの場で、まわりにいる子どもたちへ働きかけていただきたいと願うことです。わたしたちは、そうした活動の情報を発信することで、さらに「世代をつなぐ」活動を広めたいと思っています。復興のための活動は、そのよい機会です。全国のおば

あさん、おじいさんたち、ブレおばあさん、ブレおじいさんたちに、ぜひこのお話訪問の活動へのご参加を促したいと思います。

上記の訪問の際には、お話やわらべうたといっしょに本を届けることもしたいと思っています。ただ、できるだけそのとき語ったお話の載っている本を含めて、そこに集まった子どもたちひとりひとりに、その子の名前を記して手渡したい、と思います。このとき手渡す本は、広くみなさんからのご寄贈を仰ぎたいと思っています。この本を送りたいという本を選んでいただき、なぜそれを選んだかという理由を、短いメッセージにして添えていただく。たとえば、「これは、わたしが小さいとき、大好きだった本です」とか、「子どものとき、この本を読んで、〇〇ごっこをして遊んだ思い出があります」といったふうに。そして、本代にそれを届けるための費用を加えた額を寄付していただくのです。本には、その方のカードといっしょに、返信用の切手をはった封筒を添えておき、もし、受け取った子どもが本を読んで何か書きたくなったら、お手紙を書いてもらう。差出人と受け取った子どもがペンフレンドのように、手紙のやりとりをするようになったら、とてもうれしい。一冊がひとりひとりをつなぐ形で本を届けることができれば、と願っています。

また、届けるための本は、できるだけ地元の書店から購入したいと考えています。そのことが少しでも書店の支援につながればと願うことです。この活動は、日本国際児童図書評議会等の子どもの本に関する団体や、NPOと連携できるでしょう。

さらに、半年先、一年先、あるいはもっと先になるかもしれませんが、大きな被害を受けた、文庫、学校図書館、公立図書館の児童室などに、とくに蔵書再建の面で手助けをすることです。本選び、購入リスト作り、目録作り、また、装備、配架等々。これは、主に、定年退職した学校図書館員、公共図書館員の中からボランティアをつのり、その長年の経験を生かした働きを期待したいと思っています。また、当館の「子どもの図書館講座」の参加者にも、何らかの形で加わっていただきたいと思っています。この人たちには、同じ場所に複数回お訪ねする、あるいは、一定期間、現地に滞在することもお願いしなければならぬでしょう。そのためには、もちろん予算が必要になってきます。この活動については、児童図書館研究会、日本図書館協会等、関連の諸団体との連携をとりながら進められたらいいと思っています。

長期的に考えているもうひとつのことは、こ

これらの活動の記録をしつかりとることです。そして、その都度、ニュースレターの形で、あるいはホームページで、ご報告申し上げ、なおかつ、そのなかから、本が力になる事例を丹念に拾って、最終的には、まとまった形で本にしたいと思っています。わたしたちは、本と子どもがたのしく出会うことを願って仕事をしていますが、実際本と出会ったのしい思いをしている子どもたちの姿を見ることによって、また本と出会ったことによって力づけられた子どもたちの話を聞くことによって、仕事への意欲をかきたてられ、励まされます。本と子どもを結ぶ場面で目撃され、記録された、数々の「ストーリー」は、きっと子どもと本が出会うことの意味をわたしたちに再発見させてくれるものになるでしょう。

以上のような活動を行うには、資金が必要です。東京子ども図書館の経常の予算には、上記のような活動をするための余裕がまったくありません。予算の規模は、どれだけ要請があるか、どれだけの人がボランティアとして参加してくださるか、によって広がっていくでしょうが、向こう3年をひとつの区切りとして大雑把に考えたとしても、1000万円ほどは必要だろうと見込んでいます。いちばん大きなものは、ボランティアの活動費（交通費、宿泊費の助

成、保険など）と、書籍代でしょう。80の方に、5回、延400回訪問していただいて、平均1万円の助成をしても、400万円かかります。平均1000円の本を1000冊購入するとして100万円。蔵書の全部を失った文庫を支援するとすれば、1カ所で300から500冊が必要でしょうから、現物での寄付をいただけるとしても、輸送費を含めて、書籍代として300万円は見ておきたいと考えます。そのほかに、事務費がいります。印刷費、通信費、それに現地へ調査をかねて訪問する交通費、宿泊費等です。また、当初は、仕事は、ボランティアにお願いするとしても、いずれは多少の人件費の手当てをしなければ、仕事を継続して進めることはできないでしょう。状況に合わせて、臨機応変に行動するためにも、担当者の手もとにいくらかでも自由に使えるお金があれば動きがとれません。

これらのことを考えると、今年度に活動をスタートさせ、次年度に向けて活動を軌道に乗せるためだけでも、200万円ほどが必要だと思います。とにかく、動きは始めるために、みなさんに、ぜひ当座のご寄付をお願いいたします。

まだこのプロジェクトに名前もついていません

ん。理事長の松岡と理事の小関が中心になってこの事業を進めること、ブラジル関係については、渡部理事がひきつづき担当すること、社浦理事が、他の復興支援団体や、助成団体の情報を集めて調整をはかること等は同意が得られています。事務局の体制はまだ整っていません。機関誌「こどもとしょかん」の発行に合わせ、3カ月ごとの活動目標を立て、活動報告をすることにしだと思っています。これらのことについては、7月までに目途をつけて、ご報告したいと思います。

これらのことと並行して、館でも、常時、なんらかの活動を行いたいと思っています。さっそく来る5月5日の子どもの日に、児童室では、子どもたちが「元気がでたよ、元気がでるよ」を合言葉に、被災地のおともだちに贈る本を選んで、カードを作ることになっています。合わせて、子どもたちには、この日から一円募金をはじめのことを提案したいと思っています。

また、募金のためのお話会、手仕事の会なども随時行いたいと思います。少し活動が軌道に乗ってくれば、館で行われる講座、講習会の都合、そのご報告もしたいと思っています。また、こうした動きは、できるだけ早めにホームページで公開していくつもりです。

以上が2011年4月の時点で、わたしたちが考えていることですが、自分でも何かしたい、また、こういう使われ方をするのかを見届けられない寄付をするよりは、自分の関心のある子どもの本の領域で行われる活動を支援したいと思っていらいっしやる方々から、ご意見や、ご要望をいただいて、それらを取り込んで、わたしたちの計画をより実効のあがる、また関わる者にとって、よりやりがいのあるたのしいものになるよう、工夫していきたいと思います。物心両面でのみなさまのご協力をぜひお願いいたします。

最後に、もうひとつお願いがあります。今回の災害では、被災地の子どものだけでなく、どの子も、被害を受けているのではないのでしょうか。テレビで見た津波のおそろしさ、刻々と伝えられる原発の危険、くり返される大きな余震、停電や、節電で暗くなった公共の場所、大人たちの様子、まわりで見聞きするこれらのことで、不安を抱かない子どもはいないと思います。表面いつもと変わりなく過ごしているように見える子どもたちでも、深いところで心を揺さぶっているのではないのでしょうか。被災地に出かけなくても、今いる場所で、まわりの子どもたちに、

ふだんより細かい心遣いをしてくださること、少しでも不安をとりのぞくことができるようなことばをかけてくださること、それが、だれにでも、今すぐにでもできる「復興活動」だと思います。ひとりでも多くの子どもたちが、健康で、安定した心をもって育つことが、国を建て直す力になると思いますから。

(2011年4月16日記)

追記

上記の文章を記す前後に、郡山のクローバー子供図書館と、盛岡のうれし野こども図書室と連絡がとれました。何ができるかを具体的に考えるために、近いうちにお訪ねしてこうと思っております。うれし野では、仲間のいる大船渡と陸前高田で本が入用と聞いて、とりあえず館から80冊ほどを送りました。ボランティア団体等を通して送られてくる本は、文庫に関わる者としては、必ずしも喜んで子どもに届けたいと思える本ばかりではなく、被災地に「本を送る」という善意の運動も、現場では、多くの問題があることもわかっていきます。

今年度の研修生加藤清美は、多賀城市で被災しました。まだ困難のなかにある家族をおいて、

上京しましたが、片付けのため一時帰宅した折、塩釜市の藤倉保育所に子どもたちを訪ね、本の読み聞かせをしました。子どもるとき受け持ってもらった保育士の先生がお勤めの保育所で、本人にとっては、本のたのしみを教えてくださった、なつかしい先生と20年ぶりの再会でした。

公益財団法人 東京子ども図書館

〒165-0023

東京都中野区江原町1-19-10

電話 / 03 (3565) 7711

FAX / 03 (3565) 7712

URL / <http://www.tcl.or.jp>

振込先 / 郵便局 口座記号番号

0013009-115393

加入者名 / 公益財団法人 東京子ども図書館

リスボンのこと

水谷 長志

るのが間に合わないように上下の二巻を一気に読み耽った。

ロード・ノベル

東京から富山、伏木港からウラジオストックへ航路、シベリア鉄道ロシア号をイルクーツクで一度は下車するが延々の鉄路をモスクワまで、そこからワルシャワ、ベルリン、コルマール、パリ、バルセロナ、マドリッド、そして最後のリスボンへというこのロード・ノベルは、長女香織の自死を引きずりながら、偶然出会った香織と瓜二つの美少女エリカがリスボン沖へ投身自殺するという悲劇をくい止めようともかく五二歳の男の話だ。

地ビールとワイン

暗いといえば相当に暗い話ながら、次々と流れる街の描写や、とくにアル中一步手前の五十男がつぶやく酒の感想、多くは地ビールとワイン、たまにシャンパン、が読ませるし、旅心を誘う。

例えばワルシャワで、「二杯目はJech(レフ)という銘柄の地元のビールにした。八・五ズロチはハイネケンより安い。軽い割に切れがあり泡も滑らかで、相当に美味しいビールだ」のように。

ワルシャワへは行ったことはないが、驚くほ

iPhone

昨年の買い物(買い換え)の品で、私の生活にいささかの変化を与えてくれたのが、 아이폰 (iPhone 3GS [32GB])。いわゆるスマートフォンというものだ。メール、ウェブをどこでもは携帯とかわらずなんということもないし、ツイッター(Twitter)をはじめなども 아이폰・ユーザーの定石だが、ラジコ(radiko.jp)でラジオを聞く機会が増えたのは、予想外だった。

『ユーラシアの双子』

出勤の朝、自宅から駅まで歩く十分程度の時間によく聞くのが、TBSラジオの森本毅郎*スタンバイ。ブックナビと称する書評のコナーも木曜週一で流れる。たまたま一二月の九日に聞いたのが、『本の雑誌』社顧問の目黒孝二*のお薦め本で、大崎善生著『ユーラシアの双子』講談社(上・下)だった。

五〇歳で早期退職の石井隆平なる人物は、二女をもうけながら長女を自死で失い、その後離婚、職も捨てて失業保険を得ながらハローワークに通う毎日。といってもバブル期にはコンピュータ・プログラマとして高給を取っていたし、早期退職で退職金が倍出て、慰謝料や次女の養育費などを出しても当分は金に困ることはない様子だ。たまたまハローワークで閲覧した東バイカル旅行社のウェブ画面から、シベリア鉄道を乗り継ぎ、ユーラシアを横断して大西洋を望むリスボンまでの無為の旅を思いつくところから物語は、始まる。

この石井なる物語の主人公も著者大崎も、そして私も同じ一九五七年の生まれ。ついでに石井とは誕生日までが同じで、かつその日は物語の長女香織が自死した日とくる。

昨年一〇月の末にリスボンを初めて訪れていたで、その記憶も覚めやらぬ頃だったから、不思議な巡り合わせよと思いつつ、ページを繰

ど安くて、コクがあつてやはり泡が滑らかだが、ダブリンのギネスとも違うプラハのビールを思い出してしまふ、そんな書きぶりが随所で楽しめる。

最後、リスボン沖へのエリカの投身は…、結論は書かないのがこの手の小説紹介の掟だが、なにしろ大変な筆力である。

『ユーラシアの双子』の最終リスボンの章を読み返しながら、昨年の一〇月末、実質たった四日の滞在だったリスボンの旅の記憶をたどつて、つらつらオムニバス風に書いてみたいと思う。

美術書誌のための国際会議

昨年のリスボン行きは、一応、仕事で、美術書誌情報の流通に関わる欧米主要キーパーソンが集まる国際会議への出席、オブザーバというか傍聴目的での参加。会議はオープンでしかもフリーチャージながら、ともかく美術図書館界の大物が次なるステップを画策するような会合で、実のところかなりクローズドな雰囲気。詳しくは『アート・ドキュメンテーション通信』八八号に書いており、ここでは会議前後のリスボン体験を記す。

会議前々日の夜一〇時過ぎにリスボン空港着。空港は市街に近く、ホテルまでのタクシースも一〇ユーロほど。ちなみに一ユーロ一四円

ほどだったか。飛行機は地上から滑降時の車輪も確認できるほどの低空で、街中を通過していく。

会議の前日は一日フリー。快晴。ホテルでの朝食後、まずは会議会場のグルベンキアン美術館を確認。グルベンキアンはアルメニア出身の石油王。中東の石油権益の五%を持っていたため、「ミスター五%」と呼ばれた。文化財団をリスボンに設立して、管弦楽団とルネ・ラリックで有名な美術館を持つ。会議は美術館のアートライブラリアンがホスト役をつとめた。

エンリケ航海王の「発見のモニュメント」

リスボンは「七つの丘の都」と呼ばれるほどに坂の多い街。自転車は見かけない。アップダウンしながらボンバル公爵広場へ。日本の皇居回りでよく見かける二階建て巡回観光バスで南へ。リスボンが面するのは海ではなくテージョ川だが、その広さと明るさは海かと見まがう。エンリケ航海王が先導する「発見のモニュメント」もあたかも大西洋への船出の光景である。

『ユーラシアの双子』の石井もエリカも、そして自死した香織も、みんなこのエンリケとその従者の姿に惹きつけられていた。

私をリスボンの会議に駆り立てたのも、アイランドのダブリン、フィンランドのヘルシンキ、チェコのプラハといったヨーロッパの辺境

好きがいつかはリスボンへ、エンリケの碑へと願っていたからである。



発見のモニュメント
Padrão dos Descobrimentos

テージョ川の公女とジェロニモス修道院

そのエンリケの「発見のモニュメント」の下に立ったのが一〇月二七日。テージョ河畔にはもう一つ見るべきものがある。ポルトガルの旅の手引きはなんとと言っても司馬遼太郎の『街道をゆく 二三 南蛮のみちⅡ』だが、その中で「テージョ川の公女」と呼んだベレンの塔だ。司馬はこう書く。「かれら（航海者）が夜、港外で塔の灯を見、朝、塔の姿を見たとき、生きてリスボンにたどりついたという思いが、体中を溶けさせるのにちがいない」、そしてかれらを迎える「塔が女性的であるところに、ポルトガル人のやさしさを感じる」ことができないだろうか」と。『街道をゆく』の中でもっとも好

きなページの一節だ。



“テージョ川の公女”
ベレンの塔
Torre de Belém

そしてこの地区には河畔から北へ鉄道と市電をはさんだところに「皮膚色の大理石が、よほど結晶粒がこまかいのかうすぎぬを透した女性の肌を思わせるように美しい」ジェロニモス修道院が時の経つのを忘れさせる。

シントラからロカ岬へ

ベレンの見所を堪能した後、いったんホテルへ戻り近場の定食屋風情の小店で定番のバカリャウ（干し鰯）料理とビールを。以後、ランチはここと決め、鰈、鰻、鰯と日替わりで食し

ていった。



干し鰯料理と地ビール
シンプルこの上ない
Bacalhau / SAGRES

ランチ後は遠出のツアーに参加。詩人バイロンが「この世のエデン」と呼んだリスボンから西二八キロにあるシントラを経由して、ユーラシア大陸最西端のロカ岬へ。「ここに地果で、海始まる」の碑が、高さ一四〇mの断崖の上に立つ。エリカが目指した地点がここだったのか。

ファド

二日間にわたる会議は朝から夕までびっちな内容であるし、それでなくてもヒアリングに難ありの英語が機関銃のようで、頭がしびれてきた頃、終幕となった。グルベンキアン美術館のアートライブラリを見学の後、ほぼ全員、四〇名くらいだろうか、ポルトガル人の郷愁の歌、艶歌、ファドを聞かせるレストランへと繰り出す。

翌日、およそ半分のメンバーがグルベンキアン財団がチャーターのバスで市街を巡った後、リスボン北西四〇キロのマフラへ向かった。途中市街のサン・ペドロ・デ・アルカンタラ展望台に寄るが、ここは自殺の名所でもあったとアナウンスが流れると、すかさず後ろの座席にいたスイスの女性が、「トウー・マツチ・ファド（ファドの聞き過ぎよ）」と漏らした一言がなんとも上手かった。

マフラ修道院

図書館史を囁くと大広間図書館が出てくる。絶対王政期の王の権威の象徴としての図書館としてだが、その代表はスペインのエル・エスコリアル宮の図書館だ。『南蛮のみちⅡ』においても、司馬はセゴビアよりも「フェリーペ二世が異常な執念をもつて造営したその巨大建造物を見」ることを選んでいる。エスコリアルが「かな鉦ぐそ滓捨て場」「ボタ山」の意であることは同書で知ったが、宮の名としては異様だ。

さてマフラだが、ここにはエル・エスコリアルに對抗して一八世紀、時の国王ジョアン五世が植民地ブラジルの金を湯水のように費やして建造したマフラ修道院があり、その奥に壮麗な修道院図書館がある。

一〇年前、なぜかプラハではストラホフ修道院の中の図書館に入れなかったが、以前から

ずっと長い間、大きな地球儀の置いてある修道院図書館の中に身を置いてみたいと願ってきた。それが今回になった。しかも同図書館員のありったけのサービスで、『ニルンベルク年代記』などインキュナブラも披露され、手に触れてページを繰ることも写真も許してくれるなど、歓待された。なによりも修道院図書館のその真ん中に身を置いて、左右両脇の書架と書物、床の文様を施す大理石と優美な天井の上下すべてに、包み込まれる感覚に満たされた感動はいまもって忘れられない。

リスボンは久しぶりのヨーロッパであり、初めての地であり、念願の地だった。ラジオを通して『ユーラシアの双子』を読んだのも不思議な巡り合わせと思っている。

ちよつともう予期せぬ巡り合わせなどには期待しないようになっていた日常だったが、そうそうは無いにしろ、まだまだ皆無という訳でもないような気がしてきて、機会があれば、また、一步跳んでみようかなと思い始めている。



マフラ修道院図書館
Palacio Nacional de Mafra - Biblioteca

蛇足的注

* 穀郎の実兄は森本哲朗、朝日新聞記者から評論家に、中高生の時に読んだ『文明の旅歴 史の光と影』（新潮選書 一九六七）とか『ゆたかさへの旅 日曜日・午後二時の思索』（ダイヤモンド社 一九七二）とかが私の素地のどこかに影響を与えているような気が最近頓にする。

* 目黒考二、椎名誠、沢野ひとし、木村晋介が作った本の雑誌社の『本の雑誌』とも長いつ

きあいだ。目黒は顧問になったのか、椎名はただ編集人を名乗っているようだが。

オーディオブックで聴く、朗読の新しいかたち

ことばの杜 朗読ライブラリー

vol.1

名ナレーションで聴く——

日本の名作

オーディオ
ブック版

朗読：ことばの杜（山根基世、広瀬修子、松平定知、宮本隆治、好本恵）



聴き手の心に染みこむ、心地よい朗読で聞く作品群

Disc 1

山のあなた／作者紹介：ブッセ／雨ニモマケズ／注文の多い料理店／作者紹介：宮沢賢治／吾輩は猫である／作者紹介：夏目漱石／徒然草／作者紹介：吉田兼好

Disc 2

冬が来た／作者紹介：高村光太郎／オツベルと象／作者紹介：宮沢賢治／走れメロス／作者紹介：太宰治

Disc 3

千曲川旅情のうた／作者紹介：島崎藤村／高瀬舟／作者紹介：森鴎外／おくのほそ道／作者紹介：松尾芭蕉

Disc 4

わたしと小鳥とすずと／作者紹介：金子みすゞ／からまつ／作者紹介：北原白秋／こんぎつね／作者紹介：新美南吉／トロツコ／作者紹介：芥川龍之介／形／作者紹介：菊池寛

Disc 5

道程／作者紹介：高村光太郎／手袋を買いに／作者紹介：新美南吉／坊っちゃん／作者紹介：夏目漱石／枕草子／作者紹介：清少納言

Disc 6

春の朝／作者紹介：ブラウニング／信号／作者紹介：ガルシン／平家物語

（一部抄録）

一流の朗読で聞く、名作の数々

元NHKアナウンサーによる「ことばの杜」が朗読する詩、童話、小説、古典作品の名作23作品。

ラジオ深夜便などでお馴染みの「ことばの杜」メンバーが新たに吹き込んだ音源をMP3プレーヤーに収録しました。

操作は簡単！

内蔵スピーカー付き
MP3型 朗読プレーヤー



価格 12,600 円（税込）

日外アソシエーツ

東京都大田区大森北 1-23-8 TEL. (03) 3763-5241 FAX. (03) 3764-0845
E-mail: sales@nichigai.co.jp http://www.nichigai.co.jp/

— 後 記 —

「ふぉーらむ」8号をお送りします。
今回は、否応なく東日本大震災のことを触れざるを得ない号となりました。
執筆者の方の多くが、何らかの形で3.11震災に絡んだことに触れるなど、改めて強烈な体験・記憶であったことを感じます。
あらゆるものが変更を余儀なくされている中で、アナログにせよデジタルにせよ、記憶を記録する出版物、それを継承する図書館、さらにはそれに関わる人達の活動などが、改めて見直されているのではないのでしょうか。
会員の皆さんの活動をご紹介しますことで、少なくとも貢献できればよいのですが。(岩本)

「地震雷火事オヤジ」とは日常生活で恐いもの順の古典的処世訓です。4月初旬当時、女子高生達に「地震津波に原発風評被害」ともじられ、昨今はこれに大雨もノミネートされるようになりました。
もうオヤジは時の彼方へ去ったんでしょうね。
何かが変わろうとしていることは誰もが察知しているんだと思います。
さて、それが何かは皆目わかりません。
現代の処世訓はさしずめ「放射能地震津波に激甚災害」となるのでしょうがせめてそのなかに、時のかなたに去った「オヤジ」のような愛嬌のある言葉があるといいですね。そう、これでは余りに息苦しい。
なにかいいことないか子猫ちゃん、です。(森本)

ふぉーらむ 第8号

2011年10月1日発行

発行人 山崎久道

製作 森本浩介／岩本謙一／齋藤香織

発行所 図書館サポートフォーラム

〒143-8550 東京都大田区大森北1-23-8

日外アソシエーツ(株)内

TEL.03-3763-5241 FAX.03-3764-0845

http://www.nichigai.co.jp/lib_support/index.html
